

弥生時代における地方間交流

——伊勢湾地方弥生土器の型式変化と移動——

伊藤 淳 史

【要約】 本稿では、弥生前～中期の土器を考察の材料に用いて伊勢湾地方・近畿地方間の交流の実態を明らかにし、そこから弥生文化伝播後の東西日本双方の社会の動向に接近することを試みた。まず、伊勢湾地方で資料に恵まれている尾張地域において主体となる壺形土器を、特にその文様施文技術に注目して型式学的検討を行い、施文手順の省略・器表面研磨の退化という大きく二つの変化の方向性を認めて組列を見い出すとともに、明確な特徴をもとに中期Ⅰ～中期Ⅴの五段階に区分して時間軸とした。次に、この時間軸にもとづいて、伊勢湾以東から近畿地方への土器の搬入例を前期の土器をも含めて網羅的に抽出し検討を加えたところ、前期までみられた近畿地方全域にわたる搬入土器の広がり、中期には両地方が境を接する地域にほぼ限定されていく傾向にあり、中期Ⅳに至ると土器はほとんど搬入されていないことが判明した。両地方の土器変化の方向性とこの結果とを照合せると、近畿地方の土器が回転台を駆使した施文技術の発達という方向性で理解されるのに対して、伊勢湾地方のそれは回転台の特性とは全く無縁で、むしろそれを利用しない範囲で可能な限り有効な施文を試みたものと理解され、両者の方向性が対極にある時期が、中期Ⅳ（近畿地方でのⅢ期新Ⅳ期）という地方間の土器移動が途絶える時期と一致している。すなわち、土器の移動と型式変化の事情とが対応関係にあって、伊勢湾地方の土器変化が両地方間の交流関係を如実に反映していたのである。そしてそれは、前期には汎西日本的な遠賀川式文化圏に組み込まれるもの、中期Ⅱにおける汎東日本の変化を契機に近畿地方との交流は途絶に向い、中期Ⅴにおいて凹線文土器に象徴される汎西日本の変化の影響を再び被るといって、東西日本の広域にわたる動向とも対応する事象でもあったのである。

史林 七七卷四号 一九九四年七月

はじめに

日本の歴史や文化は、東日本と西日本とに区別して理解されることがある。

そもそもこうした東西の区分は、遡れば旧石器（先土器）時代にも設定し得るとされるけれども、最もそれに深く関係している事情が弥生文化の伝播・東漸であることも、必ず指摘されるところである。これは、それまでの狩猟・採集経済の段階から水稻農耕を基礎とした生産経済の段階へ転換した時代の文化して、弥生文化が日本史上に大きな意味を持つものという理由からだけでなく、その最初の伝播範囲とされるいわゆる遠賀川式文化圏^②の広がり、方言その他の多くの文化事象の東西の境界線である伊勢湾地方西岸付近までであるという一致をみせるからである^③。

日本考古学がこれまで寄せてきた関心の主要なものとして、こうした弥生文化の伝播についての問題があり、それが、「いつ」であるのかという日本史上の転換期にかかわる課題についてはとりわけ多くの関心が払われてきた。ところが、弥生中期における各地方の特徴ある土器の出現に象徴的に示されるように、遠賀川式文化圏のその後の展開に鑑みるならば、伝播にひき続いて生じている考古学的事象の空間的差異の変遷や地方間交流の実態もまた、弥生文化の受容が引き起こした人間集団のまとまりやつながりの変動を示すものとして、同様に解明すべき重要な課題であろう。

土器研究からこうした課題を追究する試みは、こと近畿地方内部に関してみれば、櫛描文様にみられる中期弥生土器の地域色についての検討が代表的なものとしてあげられよう。ここでの地域色は、櫛描文様の諸要素の地域毎での使用頻度の差として表現可能なものであり、それらの地域間には活発な土器移動が認められている。また、こうした地域色が生じた背景については、前期における遠賀川式土器定着という土器製作技術面での共通の基盤をもつ「畿内」と呼ばれる空間内で、その後に日常的な接触交流が継続したことにより生じたものである、と理解されている^④。伊勢湾地方についてみれば、前期において西岸域まで遠賀川式土器の広がりを見るものの、その後の土器の展開は近畿地方とは特徴を異にしてお

り、明らかに別種の土器製作技術をもった人間集団の広がる空間として、近畿地方に対置させることができる。弥生中期には近畿地方と伊勢湾地方との間には土器製作にまで影響を及ぼす日常的な接触交流が無かった、としてこのふたつの空間の存在を理由づけることは容易であるけれども、そのままでは一地方内における弥生社会像のみを描ずるにとどまるであろう。よって本稿では、近畿地方におけるさきに述べたような研究事例をふまえて、より広域にわたる社会の動向に接近する試みとして、上述した異なる二大地方として対置し得る空間、すなわち伊勢湾地方と近畿地方との間にいかなる交流がみられ、それがどのような背景によるものであるのかを検討することにした。遠賀川式文化圏の東端に位置するこの両地方間の交流関係には、東日本・西日本双方の弥生社会の動向が特に鋭敏に反映されているであろう。

考察の材料には土器を用い、その時間的変化と移動する土器との関連を重点的に検討する。とりわけ本稿では伊勢湾地方以東から近畿地方へ移動している土器に注目して検討を行うが、その際、多くの資料と研究史の蓄積がある近畿地方の弥生土器の変遷については既往の研究成果にのっとり概観するにとどめ、それに較べて不明な点も多い伊勢湾地方の弥生土器については、変遷観についても一定の理解を示し、時間軸として用いることにする。もっとも、二大地方を対置して比較検討するという方針から、それぞれの地方内における地域色の存在については本論に関係しない限りさしあたり捨象して考え、地方間の関係に焦点を絞って論じる点を了解されたい。

より具体的には、本論稿は以下の構成をとる。まず伊勢湾地方の中期弥生土器の変化を明らかにして特徴を明示することからはじめ、次にそれらが近畿地方に搬出されている状況を検討する。その際には、より通時的に交流関係の推移を把握して中期におけるその特色を浮かび上がらせるべく、弥生前期における搬出状況も検討対象に含めるとともに、伊勢湾地方以東からの搬出土器をも含めて検討する。そして最後に、以上の結果と、両地方における土器の型式変化との関連を検討し、それより浮かび上がる両地方間の関係について述べ、結論とする。

② 西日本弥生時代前期を特徴づける遠賀川式土器を作り使った人々の

村が広がる範囲を、佐原眞の用語に従いこう呼ぶ。

佐原眞『大系日本の歴史』1 日本人の誕生、一九八七年、二三五項。

③ 大野晋『日本語の起源』、一九五七年、岩波新書、五二～七八項。

④ 都出比呂志『日本農耕文化の生成』、一九八九年、二九八～三二〇項。

⑤ 中村友博は、本稿と同様に弥生時代における近畿地方と伊勢湾地方

との関係を対象とした研究において、弥生時代前期から中期初頭における近畿地方からの櫛描文の伝播に焦点を当てて、特に伝播に際しての技術的後退の過程を明らかにしている。中村友博「土器様式変化の一研究——伊勢湾第Ⅰ様式から伊勢湾第Ⅱ様式へ——」（『考古学論叢』

小林行雄博士古希記念論文集、一九八二年）。

⑥ あくまで考察の便宜上として、本稿で言うところの近畿地方とは奈良・大阪・京都・和歌山・滋賀の各府県を、伊勢湾地方とは愛知・岐阜・三重の各県を含む範囲を指すものとする。また、「地域」とはほぼ旧国単位程度の、「地方」はそれらを複類以上含むより広い範囲を示す言葉として用いることにする。なお本稿では、これも考察の便宜上、地域名として旧国名（尾張・伊勢・山城・大和など）を用いている。土器の地域色から想定される地域区分と旧国単位の地域の境界とは一致する部分が多い。研究の現状としてそれらの不一致や各地域内での細分も一部で指摘されているけれども、本稿の目的とかわらな

い限りさしあって捨象して進むことにする。

第一章 伊勢湾地方中期弥生土器の検討

（一）問題の所在

伊勢湾地方の弥生土器研究は、土器の内容が大きく異なる三河地域を別にすると、名古屋市西志賀貝塚や清洲町朝日遺跡など著名な遺跡に代表されるように、発掘調査の資料が蓄積されている尾張地域を中心に進められてきた。特に西志賀貝塚の調査成果を中心とした「西志賀式」「貝田町式」「高倉(蔵)式」という前期～中期にかけての型式の設定は、出土層位の上下という絶対的な前後関係に裏付けされた編年であったことから、その後の土器編年の基盤となっている。③そして、西志賀式は西日本の遠賀川式文化の及んだものとして、貝田町式は在地的特色の発現したものとして、高蔵式は近畿地方の中期後半の土器様式と密接な関係をもつものとして、それぞれ相互の脈絡は不問に付されたままではあるが理解され、前後関係を示ものとして長らく定着してきた。しかしながら、それ故に土器の型式学的な検討は等閑にされてきたきらいがあり、型式変化の方向性やその背景を追究する道は閉ざされたままであったといえる。

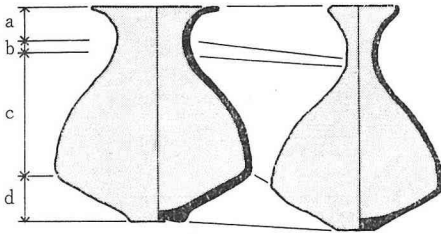
近年では、清洲町朝日遺跡をはじめとして尾張平野の低地部を中心に発掘資料が増加し、久しく弥生土器に関する議論が途絶えていた伊勢湾地方においてもいくつかの発言がみられるようになってきた。それらのうちには、土器編年に関する議論というよりも、この地方での複雑な土器様相を反映して、多様な土器群の系統やその背景に踏み込んだ論考も見られ、系統や時期区分に改変が繰り返されつつあるのが現状である^④。

本稿では、こうした動向を受けつつも、従来の土器型式の枠をひとまずとりはずして、改めて伊勢湾地方の中期弥生土器に型式学的な検討を加えることにする。ただし、伊勢湾地方の弥生土器については、中期に限定してみても、資料が不足気味の伊勢・美濃地域や土器の実態が大きく異なる三河地域をも含めて複雑な土器の全容を説き起こすことに、かなりの稿数が必要となる。さききのべたような、系統を細分しその相互の関係の動態を明らかにしていくという方向性をとるならば、こうした作業が必須のものとなろう。それらは伊勢湾地方の弥生土器に関しての別項を用意してその際に論じることとし、今回は近畿地方との交流関係の実態を明らかにするという本稿の目標を念頭において、編年や系統の細分よりも、研究史上欠落してきた型式学的変化の背景についての考察を重点的に深める事としたい。そのために特に土器製作上の技術的側面、特に文様施文におけるそれに留意して検討したい。そしてここでは、まず資料豊富な尾張地域を中心に検討し、^⑤その結果でさしあたり近畿地方に対置する場合の伊勢湾地方の状況を代表させることにする。その際、量的に主体を占め、文様を有して変化の手がかりの追ひ易い壺形土器を型式学的検討の中心に据えて、以後の議論を進めていきたい。

(二) 尾張地域壺形土器の型式学的検討

a 胴部文様モチーフの分類と施文技術

尾張地域の弥生時代中期の壺形土器は、胴部下半を除いた外面のすべてを文様で飾ることが通例であり、それらには、



c 胴部	a 口縁～頸部					b 頸・胴部界			d 下胴部		
	貝殻線描文	直線描文	櫛波状描文	文様なし	凹線+文	刺突文	浮文	櫛簾状描文	全面研磨	部分研磨	研磨なし
A類	■								■		
B類		■							■		
C類			■				■			■	
D類				■			■			■	
E類					■						■

図1 壺形土器の部位別要素

口縁～頸部・頸胴部界・胴部の三つの文様帯が設定できる(図1)。ここではまず、そのうちで主体となる胴部文様帯の文様モチーフをA～Eの5類に大別し、各類の内容を施文技術の側面をも含めて詳しくみてみることにする。なおここで扱う壺形土器は、従来の朝日式では広口壺と呼び得る一種類のみであり、貝田町式以降になると、細頸壺・広口壺・無頸壺などの器形がある。しかしながら、胴部文様帯のモチーフがこうした器形の差異を越えた共通性を有していることから、その検討の結果は壺形土器全体に通じる変化の方向性として普遍化することができる。またそれは、胴部文様帯以外の要素についてもほぼ同様なことが言える。よって以後の検討は、特に必要ない限り器形毎に説明を加えることはしていない。

A類モチーフ(図3-1-1)

これまで朝日式と呼ばれてきた壺形土器を特徴づけるモチーフであり、佐原真の用語に従えば複帯構成の櫛描直線文^⑥と見かけ上一致する。しかしながら、施文原体が櫛歯状の工具ではなく肋条を有する貝殻の腹縁であることは、直線文上に認められる庄痕の存在から明瞭である。従ってここでは「複帯構成の貝殻描直線文」とするのが適当であろう^⑦。また、これらの複帯構成の直線文が複数帯施されることは極めて稀で、幅広のもの1帯のみであることが普通であり、それ以外の部分は全面丁寧に研磨される。胴部文様帯のモチーフとしては、複帯構成の直線文が施文されている部分だけでなくその上下の研磨部分も含めて考え、それ

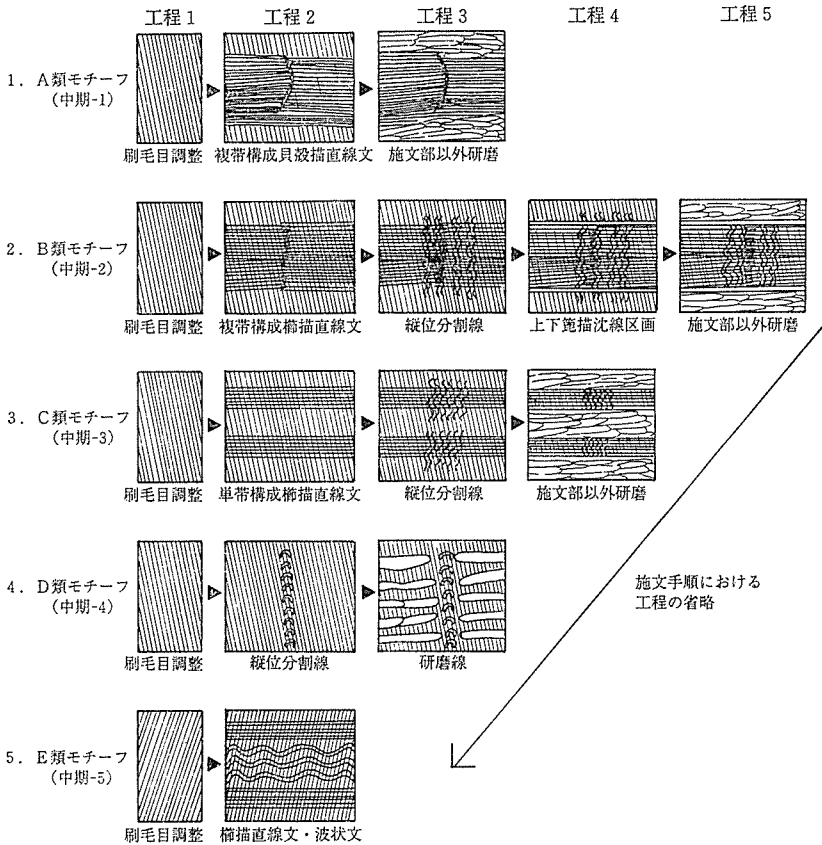


図2 胴部文様モチーフの施文手順と工程内容

をA類モチーフと呼ぶことにする。従って、モチーフ完成に至るまでの手順を復元すると、器表面の観察より施文前に縦位方向の刷毛目調整を全体に行っていることが痕跡から明かなことから、刷毛目調整→複帯構成の貝殻描直線文→施文部分以外の研磨、という三つの工程より成ることがわかる(図2-1)⑧。

B類モチーフ(図3-2)④

これまで貝田町式と呼ばれてきた壺形土器の代表的モチーフのひとつであり、上下を匏描沈線で区画した帯状の装飾を特徴とする。匏描沈線にはさまれた内部は主として複帯構成の帯描直線文であるが、横位の縄文・擬縄文帯によるものが少数見られる(図3-4)。この帯状装飾自体は一〇数帯施されるのが通例だが、

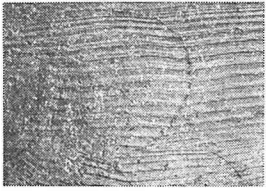
より重要であるのはこれらの各裝飾帶間を非常に丁寧に研磨することであって、帶狀文との明暗の対比は非常に鮮やかである。従って、ここでもモチーフとしては帶狀裝飾と裝飾帶間の研磨を含めて考え、それをB類モチーフと呼ぶ。なおこのモチーフの帶狀裝飾の多くは、研磨以前に櫛描の直線文・波狀文・弧狀文などによる縦位方向の分割線を数カ所施している。よってこれらの要素同士の切り合い関係から復元されるモチーフ完成に至るまでの手順は、刷毛目調整↓複帶構成の櫛描直線文↓縦位の分割線↓上下端の篋描沈線文↓施文部分以外の研磨、という五つの工程である（図2・2）。

C類モチーフ（図3・5・6）

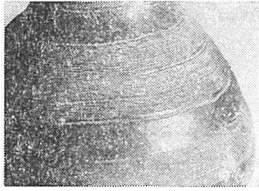
これも貝田町式の壺形土器にみられるモチーフのひとつである。帶狀の裝飾ではあるがB類とは異なって単帶構成の櫛描直線文であり、上下を区画する篋描沈線も施されていない。ただしここで注意すべきは、個々の櫛描直線文帶間はその間隔の広狭にかかわらず研磨されていることであり、施文された部分との明暗の対照はB類と同じく鮮やかである。こうした櫛描直線文帶はおおむね6〜7帯前後を数えるが、幅の狭い櫛描文と研磨とが交互に十数帯密に施されたものもみられる（図3・6）。前者をCⅠ類、後者をCⅡ類として区別しておきたい。これらC類モチーフの多くはB類と同様な縦位方向の分割線を有する。ただし、CⅡ類の場合は、上から下へ連続したひと続きの縦位線となる傾向が強い。なお、縦位の分割には櫛描文様だけでなく棒状や円盤形の粘土を貼り付けた浮文も用いることがある。モチーフ完成に至るまでの手順は、B類モチーフの場合にみられた上下端に篋描沈線文を施文する工程を除いた、四つの工程となる（図2・3）。

D類モチーフ（図3・7・8）

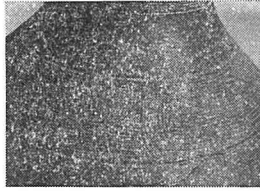
貝田町式の壺にはさらにもうひとつ特徴的なモチーフが存在する。刷毛目調整の上にある程度の幅をもった横位方向の研磨を線状に施すものである。以後これを「研磨線」と呼ぶ。こうした研磨線は、幅をもった帶狀裝飾となるもの（図3・7）と、一条の線状になるもの（同8）とに大別され、前者をDⅠ類、後者をDⅡ類として区別しておく。これらD類モチーフもまた、縦位方向の分割線を有する。ただしそれらは、上下ひと続きの貼付突帯に刻み目を施したもののや、篋や竹管



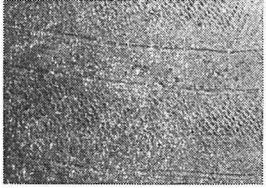
1 A類



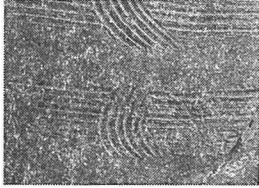
2 B類



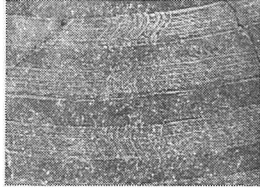
3 B類



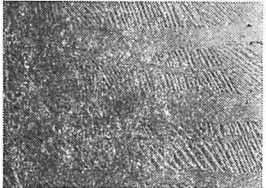
4 B類



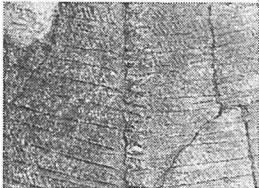
5 C I類



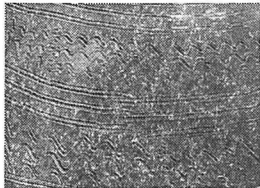
6 C II類



7 D I類



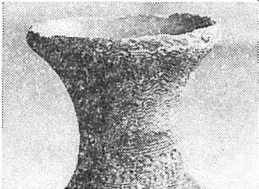
8 D II類



9 E類



10 B類頸部



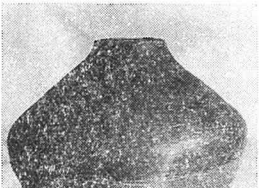
11 D類頸部



12 D類頸部



13 E類頸部



14 B類底部



15 D類底部

図3 壺形土器の胴部(1~9), 頸部(10~13), 底部(14・15) 縮尺不同

状工具の先端による縦位の刺突列など、B類・C類にみられたものと趣を異にするものが多い。モチーフ完成に至るまでの手順は、横位方向の研磨線が縦位の分割線を切って施されている切り合い関係から、刷毛目調整↓縦位の分割線↓横位方向の研磨線、という三つの工程である（図2-4）。

E類モチーフ（図3-9）

これまで高蔵式と呼ばれていた壺形土器に特徴的なモチーフであり、櫛描直線文と波状文とを交互に施す近畿地方の中期弥生土器と共通のものである。文様は時計回りに一気に施され、回転台の使用が推測される^⑭。ただし、櫛描文の原体は半截竹管状の工具を三〜四本粗く束ねたものを用いており、見た目には二条単位の直線文と波状文とが三〜四帯ずつ交互に施されているかのようである。モチーフの要素はこれらの櫛描文様のみであり、A〜D類と異なり研磨は全く施されない。従って、櫛描文様を施す以前の刷毛目調整も胴部文様帯全面に残されている。また、同一の櫛原体を用いて縦位方向の分割線を施しているものも若干あるが、それらはD類までとは順序が逆転して横位方向の施文後となっている。こうした分割線を持たないものについてE類モチーフの完成に至るまでの手順を考えると、刷毛目調整↓横位方向の櫛描直線文及び波状文、という二つの工程のみより成ることがわかる（図2-5）。

b 型式変化の方向性

それでは、以上で個別に説明を加えてきたA〜E類の胴部文様モチーフについて、型式学的な変化を考えてみよう。

まず各モチーフの完成に至るまでの施文手順という観点から検討する（図2）^⑮。幅の広い複帯構成の貝殻描直線文以外の部分が全面研磨されるA類モチーフは、三つの工程より成る。一方、五つの工程を重ねて完成されるB類モチーフと較べて、C類はそれよりも一工程、D類は二工程、E類は三工程、それぞれ工程が少ないものとなっている。つまり、B類↓C類↓D類↓E類の順で工程数がひとつずつ減少しており、B類モチーフの壺形土器からE類モチーフのそれにかけての、施文手順の省略という方向性をもった変化を想定できる。

次に器表面の研磨という点に着目してみよう。A類モチーフの場合、先に述べたように直線文帯以外の器表面全面を研磨しており、面積的にはかなりの割合で研磨が占めることになる。B類モチーフの場合も施文部分以外を全面研磨するという点ではA類と同じだが、ほぼ一帯のみに限定されるA類の直線文帯と較べて一々数帯と多帯化しているB類の場合、胴部文様帯中に占める研磨部分の割合はその分減少していることになる。同じことはC類モチーフの場合にも言え、直線文帯は更に多帯化しているので当然それにつれて研磨する面積も減っている。D類モチーフの場合は楯描の直線文帯が消失して研磨のみが帯状に残ったものであり、またE類モチーフに至っては全く研磨することとは無縁のモチーフとすることが出来る。このようにA類からE類にかけては「研磨の省略」という一貫した変化の方向性が存注することがわかる。そしてそう理解することで、例えばCⅡ類のようなモチーフを介注させることでC類からD類への変化をよりスムーズに考えることができるし、DⅡ類モチーフを構成する研磨線も、それ以前のB類やC類のモチーフで施されていた直線文帯間の丁寧な研磨が省略されていくうちに退化して残存した痕跡として、一種のルゼメントに類するものが意匠化したものと理解できる。

以上より、A類↓B類↓CⅠ類↓CⅡ類↓DⅠ類↓DⅡ類↓E類という各モチーフ及びそのモチーフを有する壺形土器の一連の型式変化をここで想定することができるだろう。そしてこの順序で改めて胴部文様を見直すと、①横位方向の直線文帯の多帯化、②直線文帯毎に断続していた縦位方向の分割線が上下に連続してひとつづぎのものとなる、という変化の方向性もあわせて存注していることが、判明する。もっとも、すべての要素がA類からE類までスムーズに連続して捉えられるわけではない。これらの断絶については後に改めて触れるところがあるので、次には、胴部文様帯以外の属性の変化が、ここで述べた型式変化の方向性とどのように対応しているかをまず検討しておこう。

c 各属性の型式変化

最初に、胴部文様帯以外の口縁・頸部及び頸・胴部界文様帯について変化を追跡してみよう(図1・3)。なおこれ以後、

胴部文様帯A類モチーフの壺形土器・B類モチーフの壺形土器をそれぞれ単にA類・B類、というように省略して呼ぶ。

口縁↘頸部文様帯(図1-1a)については、A類では、複帯構成の貝殻描直線文帯が頸部のもっともくびれた部分に一带施される。この場合、口縁端部に近い部分は文様が施されないままであり、丁寧に研磨されている。ところが、B類になると、口縁部の端付近までの頸部全面が複帯構成の櫛描直線文で埋められるようになり(図3-10)、それがC類になると、そのうちの口縁端部付近のみは波状文に代えるものが多くなってくる。さらにD類となると、それらの波状文の占める割合が高くなって、口縁↘頸部の大半を波状文で埋めてしまうもの(同11)が目立つと同時に、刷毛目調整を施したままで放置したもの(同12)も多くみられるようになる。これらはE類に至ってその趣を一変させ、上から順に、凹線文↓板状工具の木口の刺突文↓櫛描直線文、という組合せを典型的なものとする構成になる(同13)。すなわち口縁↘頸部文様帯については、特にB類からD類にかけて、複帯構成の櫛描直線文が粗雑な櫛描波状文にとって代わられたり、省略され無文化していく変化の方向性を想定することができる。

頸・胴部区画文様(図1-1b)については、A類には全くその例を見ない。B類の多くも区画文様を持たないけれども、特に広口壺を中心に、刺突文様列や刻目突帯などもつものの一部ではあるが見受けられる。C類・D類になると壺のほとんどがこの文様をもっており、各種の刺突文様に加えて円形浮文を列状に施すものを併用する(図3-12)など、バラエティに富んだ内容となっている。そしてE類になり口縁部に凹線文を施すようになると、これらは一条の櫛描簾状文にほぼ集約されてしまう(同13)。つまり頸胴部区画文様の場合は、全くそれを施さないA類はじまって、一部の個体に頸部と胴部を区画する意識が文様として表現されはじめるB類、そしてその意識がより強まったC類を経て、ほぼ全ての個体に及んで表現方法も多様化するD類へと至るといふ変化の方向性を考えることができる。頸胴部の区画を意識した文様と言う点では、E類の櫛描簾状文もその流れの延長に位置づけられるけれども、簾状文そのものはそれまでの流れとは全く無関係に出現したものと言え、D類とE類の間には断絶する要素もあるとみるべきだろう。

それでは、文様が施されない胴部下半(図1-d)の器面調整はどのように変化しているだろうか。A類では、複帯構成の貝殻描直線文を施した部分以外は全面を丁寧に研磨するのが常であり、胴部下半もその例外ではない。B類もこの傾向を引き継いでいるけれども(図3-14)、C類からD類にかけては研磨の丁寧さは影をひそめ、胴部下半は刷毛目調整がされたまま放置されるようになってしまう(同15)。この場合に研磨されるのは、胴部上半と下半の境界となる屈曲部付近のみである。E類においては研磨は全くされず、D類と同じく刷毛目調整のままであるかあるいはそれをなで消して平滑に仕上げている。以上の変化は、胴部文様帯においてみられた研磨の省略という方向性に従っているものと言える。

最後に、壺形土器の器形の変化を追跡してみよう(図4)。

まず、底部と胴部の形態変化をみてみる。ここで挙げた広口・細頸等の壺形土器の器形の違いは、頸部より上の部分のみの違いであって胴部以下の形態はそれと無関係に共有されているので、底部と胴部の形態変化も文様モチーフと同様壺形土器全般に通じる変化の方向性として捉えることができる。¹⁵⁾ A類の底部をみると、突出が顕著である。この突出に着目してみると、B類の場合もかなり突出した底部形態をとっていることが目につくけれども(図3-14・図4-6など)、それがC類・D類となるにつれて次第に突出が弱くなって扁平化していき(図3-15・図4-7~14)、E類になると全く突出せず厚みにも乏しい扁平で平滑な底部になってしまっている(図4-15・16)。また胴部形態も、最大径部が比較的高い位置にあったA類(同1)から、次第にそれを低い位置に移していき、かつまた直線的であった頸部から胴部にかけてのラインが徐々にふくらみを増し(同5~14)、最終的にはE類にみるような偏球形の胴部形態(同15・16)になっていく一連の変化を看取ることが出来る。このように、胴部以下の器形の変化はA類からE類にかけてスムーズに流れていることを確認できる。また、口縁・頸部にかけての器形をみた場合、外見上は器形が細頸化していく様子を漸移的に追跡可能であり(同2~4)、これらをA類とB類の折衷的な形態ととらえることも可能であるけれども、受け口状口縁の出現は突然であるとしか言い得ず、ここには断絶を認めなければならぬだろう。そして、従来高蔵式と呼ばれてきた壺形土器に相当するE

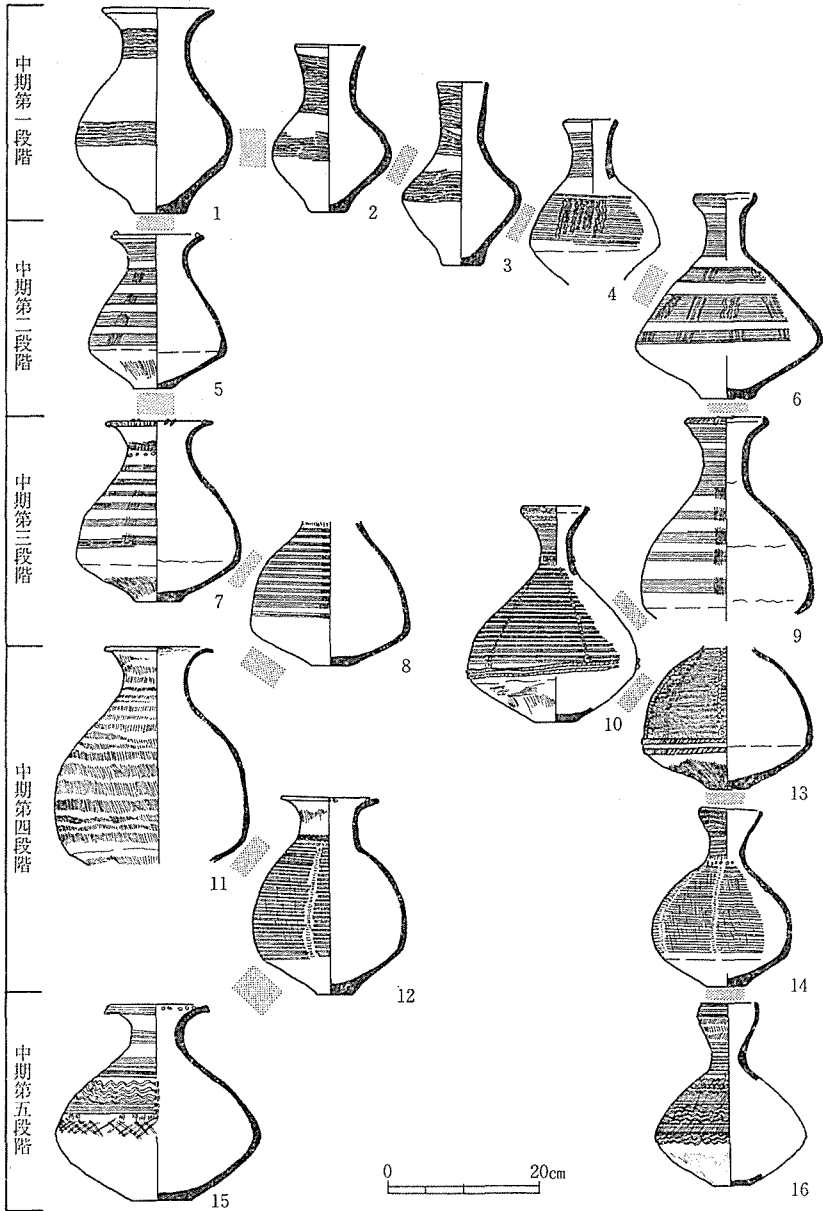


図4 壺形土器の型式組列（12のみ縮尺1/16，他は1/10）
 8・9・11西志賀，10・13阿弥陀寺，15瑞穂，それ以外朝日遺跡

類については、研究史的には西日本の影響を強く受けたものとされてきており、実際D類とE類の文様モチーフは全く異なっている。しかしそれは、あくまでモチーフにとどまるものであって、器形変化や調整・文様施文の手抜き方向性などは、D類からE類にかけてスムーズに流れを追うことができる。従来の評価が全面的に否定されるものではないが、要素毎に内容を峻別しておく必要があるだろう。

以上みてきたように、胴部文様帯によってまず設定したA類からE類にいたる型式変化は、壺形土器の各属性における変化を検討してみても、要素によって若干の断絶は認められるにしても、大きな矛盾は生じていない。従ってそれは、胴部文様にとどまらない壺形土器そのものの型式変化であると考えて差し支えなく、ここに一貫した壺形土器の型式組列が設定されることになるのである(図4)。

d 出土状況による検証と中期5段階区分

これまで述べてきた型式組列は、層位的に確認された前後関係を出発点としているので、逆転することはありません。ただし、このままでは型式学的に区別された各類の時間幅については判然としない。また、壺以外の器種が近畿地方に搬出されている事例は目下少ないけれども、次章で述べるように、前期から中期前半期を中心に条痕文土器の搬出が多く報告されており、それらの伊勢湾地方での時間的位置づけを確定しておく必要もある。よってここでは、近年の調査成果から出土状況を検討することで、各類の存続するおおよその時間幅を推定するとともに、今後の検討にとって関係の深い条痕文土器については、確実な共存関係と特徴を把握することで編年的位置づけを明確にしておき、近畿地方との関係を考察するための前提条件を満たしておくことにしたい。

伊勢湾地方において検討に耐え得る出土状況は必ずしも多くないが、まずそのなかから、A類とE類の文様がいかに出土しているかをみてみよう。

A類については、西志賀Ⅱ層の下層出土品として層位的に弁別されたものであり、その後貝殻山貝塚第四地点の中期貝

層^①や朝日遺跡一次調査中央地区Ⅱ6A5区ピット^②などでまとまった出土をみていることから、これらの遺跡が位置する尾張平野低地部においては一定の時間幅を占めていたことは確実である。周辺に目を転じると、鈴鹿市東庄内B遺跡SK56出土例^③がまとまったものとして挙げられるが、弥生時代を通じての継続的な集落と目される名古屋市高蔵貝塚や津市納所遺跡^④などでは、純粹な出土はなく量的にも少ない^⑤。伊勢湾地方全体としてみたととき、A類の存続時間幅は短く見積もっておく必要がある。

これと対照的にB類は伊勢湾地方全体で多くの一括出土例がある。愛知県海部郡甚目寺町阿弥陀寺遺跡でⅠ期とされている諸遺構^⑥をはじめとして、名古屋城三の丸下層遺跡住居址^⑦、東庄内B遺跡SB177^⑧、三重県多気郡多気町花の木遺跡SK23^⑨などがまとまったものとして挙げられる。

C類・D類は、胴部文様からは明瞭に区別されるものであるが、B類に較べると出土例は多くない。阿弥陀寺遺跡SB71はCⅠ類の、SB92はCⅡ類の比較的單純な出土例ととらえられる。また、朝日遺跡一次調査中央地区一号墓や朝日遺跡SD112^⑩における出土例は、DⅡ類を主体とした内容をもつ。こうした事例を除くとCⅠ・CⅡ・DⅠ・DⅡの各類が單純に出土している事例は見出し難く、それぞれ混在して出土する傾向が強い。尾張以外の地域においてもこれらの出土は確認されるが、同様に單純な出土例には恵まれていない。こうした状況に鑑みると、CⅠ・CⅡ・DⅠ・DⅡ各類の細分は、型式学的な方向性としては成立するものの、出土状況の現状からは互いの存続期間を確定し難いと言え、今後の出土事例から更に追証していく必要がある。

E類は、既に高蔵式として古くに設定され学史的に多くの追証を経てきている土器群を象徴する文様であり、伊勢湾地方全体でみられる非常に多くの一括出土例をここで改めて紹介する必要はないと思われる。

以上より、あくまで現段階での出土状況からではあるが、まとまって出土する事例の多いB類とE類に較べて、A類・C類・D類はそうした事例に乏しいと言え、それぞれが弥生時代中期に占める時間幅が長短まちまちのものであった状況

が想定される。こうした事情に配慮して、ここでは、時間的変化であることが明かなA類とE類の各型式を、弥生時代中期の時間幅の中で古く新の様相を示す段階として理解しておきたい。よって、伊勢湾地方の弥生時代中期を五つの段階に区分して今後の考察に供することにする。すなわち、A類を指標にして中期第一段階(以後中期―1と略記する)を、同様にB類で中期―2、C類で中期―3、D類で中期―4、E類で中期―5を、それぞれ設定するのである。ちなみに従来の編年とこの各段階を対応させるならば、中期―1が朝日式に、中期―2と中期―4が貝田町式に、中期―5が高蔵式に、おひねそれぞれ相当することになる。

(三) 条痕文土器の時間的位置づけ

それでは次に、条痕文土器について簡単に検討を加えておこう。

条痕文土器は、縄文晩期末と弥生時代中期前葉にかけての伊勢湾地方を特徴づける土器群であり、特に弥生時代以降については美濃・三河地域を主な分布範囲とし、前期段階で遠賀川式土器が波及している尾張地域では客体的な存在である。おひね前期並行期が水神平式、それに後続する中期前葉並行期が岩滑式として設定されている。しかし、それぞれの内容の異同については研究史上多く言及されているにもかかわらず、資料的な制約もあって明確でない点も多い^②。次章で触れるように近畿地方に搬出された例が多くみられるため、前期と中期の違いの大略を明確に把握し、時間的位置づけをしっておきたい。

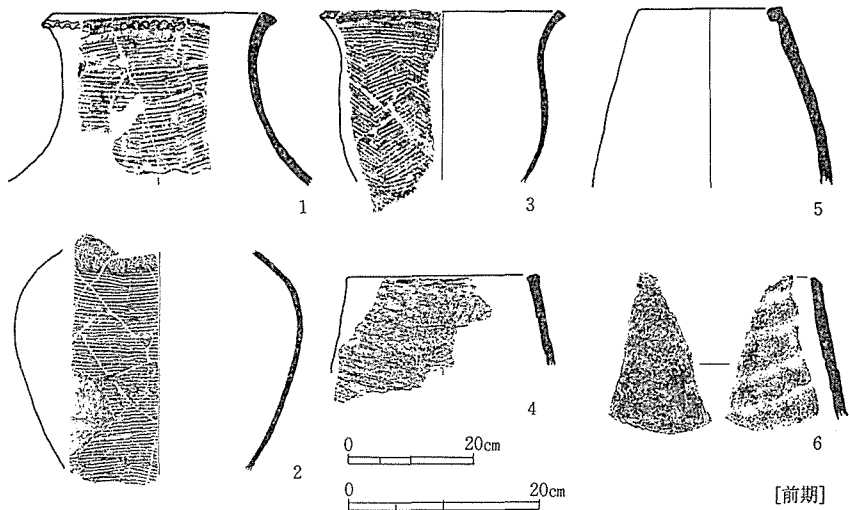
名古屋市教育委員会の報告による高蔵貝塚SD03^②及び、シンポジウムにより資料のみが公表されている溝D2^②は、前期の一括資料である。この資料に含まれる条痕文土器で、前期並行期の内容を代表させておく。中期―1並行期の条痕文土器の内容は、さきに挙げた貝殻山貝塚第四地点中期貝層中に含まれている資料をひとつの手がかりとできよう。そして、これらのみでは内容に不足が生じるので、尾張地域以外でありまた資料の一括性にもやや欠けるけれども、該当する資料

が多く出土し標式遺跡ともなっている半田市岩滑遺跡溝状遺構出土資料^②や、知多郡美浜町下高田遺跡出土資料^③などで補うことにしよう（図5）。

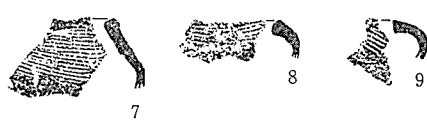
以上を見較べて、前期段階に位置づけられる資料と中期段階のそれとの顕著な違いとして認められるのは、壺における受口状口縁の有無や、肩部文様の波状文からはね上げ文への変化、そしていわゆる内傾口縁土器あるいは厚口鉢と呼ばれるものの器形の変化、であろう。ここで特に近畿地方との関係で問題となるのは、次章で取り上げるように同地方での出土事例の多く認められる内傾口縁土器・厚口鉢（図5・4～9・14～18）であり、これらの型式学的位置づけを明瞭にしておく必要がある。前期段階の資料は、器形全体が判明する資料は無いものの、胴部が筒形で口縁が弱く内彎する無頸壺と呼ぶべき特徴をもっており、器壁は厚く、内面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に残される。外面は条痕調整のもの（同4）と、削りや撫で調整のものがある（同5・6）。これに対して中期段階の資料は、口縁部が水平に近く内彎する浅鉢形であり、口縁部は著しく肥厚している（同14～18）。そしてこのほかに、下高田遺跡出土例のように、口縁部は強く内彎しているものの端部の肥厚はそれほどでもない形態のもの（同7～9）がある。時期的な帰属が問題となるのはこうした中間的形態のものであり、これらが遠賀川式土器とはこれまでに明かな共存関係を示していない点に鑑みると、中期に下る時期に位置づけておくのが妥当といえるであろう^④。

現状ではいづれもが内傾口縁土器あるいは厚口鉢と呼ばれており、区別が曖昧である。前期段階の無頸壺に近い器形のものの内傾口縁土器（同4～6）、中期に下る浅鉢形のものうち、下高田例のような中間的形態を厚口鉢A（同7～9）、口縁端部の肥厚が著しい典型的な厚口鉢を厚口鉢B（同14～18）と呼んで区別することにした。厚口鉢Aは厚口鉢Bに先行する形態のものと予想されるが、中期1・2以降の資料とこの厚口鉢は共存した事例がなく、中期1のうちに急激に変化を遂げ消滅したものと思われる^⑤。

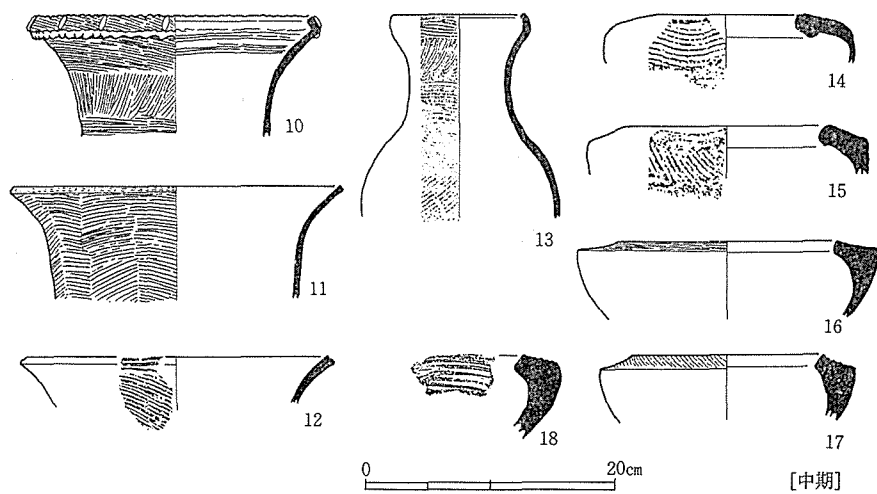
それでは、次に、以上の結果にもとづいて近畿地方との関係の検討に稿を進めよう。



[前期]



- 1・3・5・6 高蔵貝塚 SD 03
- 2・4 同 溝 D2
- 7~9 下高田遺跡
- 10・11・16・17 岩滑遺跡溝状遺構
- 12・14・15 貝殻山貝塚第4地点中期貝層
- 13・18 岡島遺跡 SD 24



[中期]

図5 前期～中期前葉期の条痕料土器 (1・3・10～13縮尺1/8, 2縮尺1/12, 他は1/6)

① 旧国名での尾張地域に含まれる知多半島は、弥生土器でみれば三河地域に近い様相を呈している。よって、以後本稿で尾張地域と言う場合は知多半島を除いて考えることにする。

② 杉原荘介「尾張西志賀遺跡調査概報」（『考古学集刊』第三冊、一九四九年）。

③ 杉原荘介による型式設定以後の編年史を、ここで簡単に述べておく。清洲町貝殻山貝塚では、弥生時代前期の西志賀式の包含層よりも下層でそれよりも古相を呈する遺賀川式土器の存在が確認され（澄田 一九五五年）、のちに前期の古い部分は「貝殻山式」と呼称されるようになった（吉田・紅村 一九五八年）。この西志賀式と貝殻山式は、それぞれ近畿地方での第Ⅰ様式中段階と新段階に対応するものと理解できる。一方、西志賀式包含層と中期の貝田町式包含層の間にも、両者と異なる特徴をもった土器の包含層が確認され、同様な土器の出土をみている。朝日遺跡の名称をとって「朝日式」が設定された（久永 一九五五年、吉田・紅村 一九五八年）。杉原荘介も再度の西志賀貝塚調査で層位的に確認しており、「西志賀Ⅱa式」（西志賀Ⅱb式が貝田町式にあたる）と呼んでいる（杉原・岡本 一九六一年）。なお、田中稔らが高蔵貝塚の調査成果から貝田町式と高蔵式との間に設定した「外土居式」（田中 一九五四年）については、明示された内容が不足しており、その後定着していない。本稿でも用いない。また、高蔵式から弥生時代後期とする考え方もかつてあったけれども（吉田・紅村 一九五八年）、それが近畿地方の第Ⅳ様式と密接な関係にあることに鑑みて、現在一般的にように高蔵式までを中期とし、それとは内容的にも大きく異なっている後続する山中式から後期とする。山中式以降の土器の編年は大参義一が基本的な枠組みを作成しており（大参 一九六八年）、現在ではそれに先行する段階としての「見晴台式」も設定されつつあるが（宮腰 一九九一年）、いずれも本稿では対象外であるの

で、ここでは詳しく触れない。弥生時代中期について以上をまとめると、中期前葉Ⅱ朝日式、中期中葉Ⅱ貝田町式、中期後葉Ⅱ高蔵式となり、本稿ではこれまでそのように呼称されてきた土器群を対象として作業を行う。澄田正一「日本原始農業発生の問題——美濃・尾張の先史考古学的研究——」（『史学』第4号 名古屋大学文学部研究論集XⅠ、一九五五年）。田中稔「高蔵貝塚群E地点調査概報」（『豊橋市瓜郷遺跡調査会「高蔵貝塚」、一九五四年）。吉田富夫・紅村弘「名古屋市西志賀貝塚」（名古屋市文化財叢書第一九号、一九五八年）。大参義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合——」（『史学』第一六号 名古屋大学文学部研究論集XⅦ、一九六八年）。久永春男「東海」（杉原荘介編『日本考古学講座』第四卷 弥生文化、一九五五年）。杉原荘介・岡本勇「愛知県西志賀遺跡」（日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』本文編 一九六一年）。

④ 例えば、石黒立人「弥生時代の遺構と遺物」（愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』、一九九〇年）。石黒立人「弥生中期土器にみる複数の〈糸〉」（『考古学フォーラム』第一号、一九九〇年）。

⑤ 尾張地域の中でも、清洲町朝日遺跡・甚目寺町阿弥陀寺遺跡・名古屋市内西志賀貝塚の出土遺物を中心とする。

⑥ 佐原真「畿内地方」（小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』本編2、一九六八年）。

⑦ この点についてはすでに中村友博による指摘がある。朝日遺跡出土品で観察し得た限りにおいては、多くは貝殻腹縁を原体として用いていると判断できる。ただし近畿地方と同様な櫛描又原体を用いているものもわずかながら存在しており、少数ながらこれらも並存していたのか、時間的な差異によるものなのかは、現状では判断できない。犬山市曾野遺跡出土品（京都大学文学部博物館蔵）は貝殻櫛描であるが、長浜市塚町遺跡 S.No. SR01 出土品は櫛描文であり、それ以西の近江地

域には基本的に存在しない。伊勢地域では、津市納所遺跡出土のものを見る限り貝殻を原体に用いているとみられ、尾張地域と同様な状況であることが推測される。愛知県教育委員会『環状2号線関係朝日遺跡群第一次調査報告』。一九七五年。愛知県教育委員会『朝日遺跡』I 本文編一 一九八二年。古川登「近江における弥生時代中期前半の土器について——長浜市塚町遺跡 SK02 出土の一括遺物を中心に——」『滋賀考古』第四号、一九九〇年。三重県教育委員会『納所遺跡——遺構と遺物——』。一九八〇年。

⑧ この場合、施文前にも一部に研磨やなでが施されているなど観察によつては把握不可能な工程が存在する可能性もある。こうした事情はA～E類すべてについて同様である。本稿では基本的に確認し得る工程のみに限定した。

⑨ B類モチーフの櫛描文は、近畿地方の櫛描文とは趣を異にして非常に一本一本の条線が細いものであり、モチーフと使用原体に密接な結びつきのあることがわかる(図3・2・3参照)。なお、A類モチーフで原体としていた貝殻腹縁は全く用いられなくなる。

⑩ C類モチーフの櫛描文は、条線の細いB類モチーフのそれとは再び趣が変わり、見かけ上は近畿地方にみられる櫛描文と類似するものがほとんどとなる。

⑪ これと見かけ上類似のものが、近畿地方のうち大和・河内・和泉地域を中心に、弥生時代中期の壺形土器に櫛描文と組み合わせて施されている場合があり、「寛磨研線」と呼ばれている。しかし近畿地方の例は、そのみが単独で施されることはなく、櫛描文帯間の間隔の広狭にかかわらず櫛描文と組み合わせて一条の線を施している。そして施文は胴部に限らず頸部に及ぶ場合もある。このように、外見上は類似しているものの使われ方は全く異なるものと言つてよく、伊勢湾地方の研磨線とは関連の無いものと判断している。大阪文化財センター

『池上遺跡』第二分冊・土器編、一九七八年、三二・三六項。

⑫ 文様の施文方向の問題については、筆者が観察する限りにおいて、おおむねA類モチーフが時計まわり、B～D類モチーフの場合は反時計回りである。佐原眞の研究に従えば、A類のみは畿内型櫛描文に属すると言えるが、一回転で施したというよりは断続的に何度も書き継ぎをしており、回転台の能率的な使用はうかがえない。ところが、E類においてこれが再び時計まわりに変化した際には、これと連動するかのよう施文前の胴部表面の刷毛目調整も、A～D類が右下がり方向(↘)を中心とするのたいして、E類は左下がり方向(↙)を中心としており、施文前の段階をも含めた技術的な変革が生じていると判断できる。なお高蔵式期壺形土器のこうした技法の特徴については丹羽博も言及している。佐原眞「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察——櫛描文と回転台をめぐって——」『私たちの考古学』第五卷第四号、一九五九年。丹羽博「尾張地方弥生式土器の製作技法——高蔵期を中心に——」『マージナル』第二号、一九八三年。

⑬ ここでは、施文手順の省略・簡略化に特に焦点をあてて研究を行った小林達雄・鈴木公雄らの成果を参考としている。

小林達雄「縄文早期前半に関する問題(多摩ニュータウン遺跡調査会『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ、一九六六年)。鈴木公雄「安行系組製土器における文様施文の順位と工程教」『信濃』第二一卷第四号、一九六九年。

⑭ E類の場合、該当するのは細頸壺のみである。広口壺の場合は、例えば(図2・15)のように口縁端部に凹線文を施す以外は無文様である。もっとも広口壺そのものは出土例に乏しい。

⑮ こうした現象が生じている背景としては、広口壺・細頸壺・無頸壺のいずれにも共通するひとつの技術的規範の存在がある。すなわち、これらの壺形土器には、いずれも胴部最大径部と頸・胴部境界付近に

土器成形段階の明確な単位を示す接合痕や擬口縁を確認でき、それらは頸部より上の部分が如何なる形態をとろうと共通している。頸部までの成形で中断したものがすなわち無頸壺であり、頸部より上を大きくするかしないかの違いで広口・細頸の別が生じている。これを言い替えるならば、胴部以下の部分については技術的にも全く同一のやり方で造られている、ということである。

- ⑬ 前掲注③文献（杉原・岡本 一九六一年）。
- ⑭ 愛知県教育委員会『貝殻山貝塚調査報告』、一九七二年。
- ⑮ 前掲注⑦文献（愛知県教育委員会 一九七五年）。
- ⑯ 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』、一九七〇年、四五～八〇項。
- ⑰ 高蔵貝塚ではA類文様はほとんど認められない。納所遺跡では、第2様式土器とされている壺がこれに相当するが、出土は少量であり、多量の第3様式前半とされる土器群と混在していたと報告されている。
- ⑱ 前掲注⑦文献（三重県教育委員会 一九八〇年）、四二項。
- ⑲ 愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』、一九九一年、一八～一九二項。
- ⑳ 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡』（一）、一九九〇年、一〇項。
- ㉑ 前掲注⑩文献。
- ㉒ 三重県教育委員会『近畿自動車道（久居・勢和）間埋蔵文化財発掘調査報告』第一分冊の一、一九八九年、七五～一六六項。
- ㉓ 前掲注⑩文献（愛知県教育委員会一九八二年）、二五項。
- ㉔ 速賀川式土器・条痕文土器の両系統の土器群の並行進化とそれを用いた集団の対立関係を想定する紅村弘の一連の研究をはじめとして、

多くの研究者がこの土器群にかかわる問題に言及しているが、ここでは概略を記すにとどめる。なお、『条痕文土器』と『条痕文系土器』の双方の呼び方があるが、本稿では前者で統一する。紅村弘「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係——土器型式の分類とその編年——」（『古代学研究』第一三号、一九五六年）。紅村弘・増子康貞・山口克「東海先史文化の諸段階」本文編・補足改訂版、一九八一年、七九～一六五項。

- ⑳ 名古屋市教育委員会『高蔵遺跡発掘調査報告書』、一九八七年。
- ㉑ 愛知考古学談話会『条痕文系土器文化をめぐる諸問題——繩文から弥生——』資料編一、一九八五年、五〇～五五項。
- ㉒ 半田市『半田市誌』資料編一、一九六八年、一二三～一三三項。
- ㉓ 美浜町教育委員会『下高田遺跡』、一九七七年。
- ㉔ 貝殻山貝塚第四地点中期貝層の出土品（図5・14・15）は、（同16・18）の岩滑遺跡・岡島遺跡出土品に較べて口縁端部の肥厚が若干弱いと言え、下高田遺跡の出土品（同7・9）により近い特徴をもつ。地域差である可能性も否定しきれないが、これも下高田遺跡出土品を中期に下げる理由のひとつである。
- ㉕ 例えば、愛知県西尾市岡島遺跡のような中期1・2並行期以降が中心で中期1の遺構が希少な遺跡で厚口鉢Bの出土しかみない（図5・18）ことは、厚口鉢Bが厚口鉢Aに後出しより中期1・2に近い時期のものであることのひとつの証明となる。愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』、一九九〇年。
- ㉖ この点については中村友博がすでに触れている。中村友博「水神平式土器」（金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第四巻・弥生土器Ⅱ、一九八七年）。

第二章 近畿地方との対応関係

(一) 近畿地方での時間軸

近畿地方、なかでも大和・河内・摂津を中心とする地域の弥生土器研究は、第二次大戦前に第一様式から第五様式までの変遷観が呈示されて以降^①、戦後はその時間的・空間的細分の試みが繰り返されて現在に至っている。近年の膨大な発掘調査資料と複雑な問題点の全てを網羅する余裕は無いので、中期を中心として、特に土器編年を中心に研究の現状を概観し、本稿でこれから用いる時間軸を明確にしておきたい。

かねてより畿内弥生土器の変遷は、特に壺形土器の文様の変化に着目することで、篋描沈線紋(前期)↓櫛描文の出現と盛用(中期)↓無文化(後期)という特徴で把握されてきた。戦後はここに土器製作技術の変遷、とりわけ回転台の使用による回転運動を利用した土器製作という観点から検討が加えられ、第Ⅰ様式から第Ⅴ様式までの編年に、回転台使用開始と篋描沈線の多条化(第Ⅰ様式新段階)↓回転台使用による櫛描施文の開始(第Ⅱ様式)↓回転台を利用した櫛描施文の発達(第Ⅲ様式)↓回転台を駆使した凹線文の発達と櫛描施文の衰退(第Ⅳ様式)↓回転台の放棄による無文様化(第Ⅴ様式)、という意味づけがなされている^③。ただし、凹線文の出現と盛用は段階的なものであると同時にそれが必ずしも櫛描施文の衰退とは時期を同じくしないことが現注では明らかにされており、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の弁別に関しては定見をみていない。また畿内地方のなかでも、特に弥生時代中期に関しては、器形や文様などに地域的な差が顕著に認められる実態も判明して久しい^④けれども、それらの地域間の併行関係を厳密に確定していくにはいまだ問題点が多い^⑤。

以上の状況に鑑みて本稿では、小地域単位で議論が深められている細別編年を採用するよりも、かつて『弥生式土器集成』で設定された編年観^⑥に依拠することが近畿地方という単位で考える場合にはやはり有効かつ明解であると考え、これを採用することとする。したがって弥生時代中期に関しては、第Ⅱ様式・第Ⅲ様式(古)・第Ⅲ様式(新)・第Ⅳ様式、とい

う四つの時期に区分することになる。以後それぞれⅡ期・Ⅲ期（古）・Ⅲ期（新）・Ⅳ期、と略記する^⑦。なお、近江地域の土器に関しては、ここでは便宜的に近畿地方の時間軸に準じて理解しておく。地域固有の特徴を示す土器群が存注するとともに、近畿地方・伊勢湾地方の双方の土器とも共通点を有する地域であるが、両地方それぞれと比較した場合には、より近畿地方に近い様相を示していると考えられるからである。

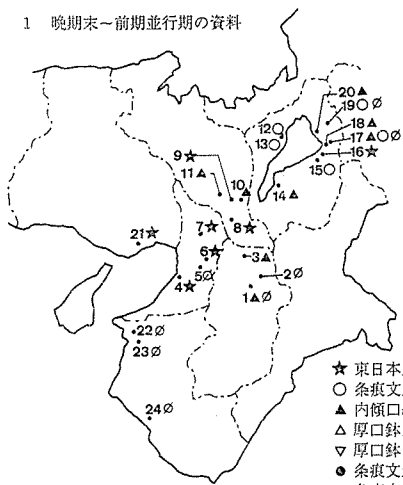
（二）伊勢湾地方からの搬入土器

それでは、前章において特徴を明示した伊勢湾地方の中期弥生土器が、近畿地方において出土している状況を検討してみよう。ここでは、若干の搬入土器の出土がみられる若狭湾沿岸や兵庫県域など近畿地方に隣接する地域も検討対象に加えるとともに、条痕文土器のように伊勢湾地方でも東岸域が主体的な分布域であるものや、それよりさらに東の地方からの搬入品と思われる土器も含めてとりあげることにする。また、のちに触れるように円窓付土器については、他の搬入土器とは異なる性格のものであるので、区別して表示しておきたい。これらの把握は、それぞれ出土遺跡の調査報告書などにもとづいており、未報告の資料は除いている。また搬入土器と報告されていても明らかに誤解していると思われるものはとりあげておらず、逆に特に言及されていなくても搬入品と筆者が判断したものはとりあげている。これらは実見して確認するように努めた。抽出した搬入土器はかなりの数にのぼるため、資料の性格別に符号化し、(図6-1-1~4)のように出土遺跡毎にまとめて表示した。以下、この図にもとづいて話を進めよう。参考に供した文献は文末に一括して掲げている。なお、ここでの対象と逆方向の移動、すなわち近畿地方から伊勢湾地方へと土器が搬出されている例についても探索したが、弥生中期に関する限り明確に確認できなかった。

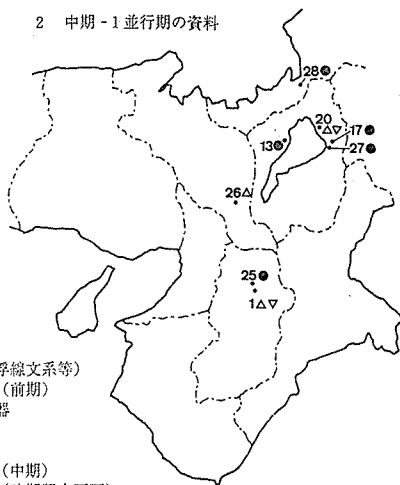
a 前期～中期Ⅰの土器の広がり

中期Ⅰの伊勢湾地方においては、前章で述べたように外面を条痕調整する特徴をもった一群の土器も、前期よりひき

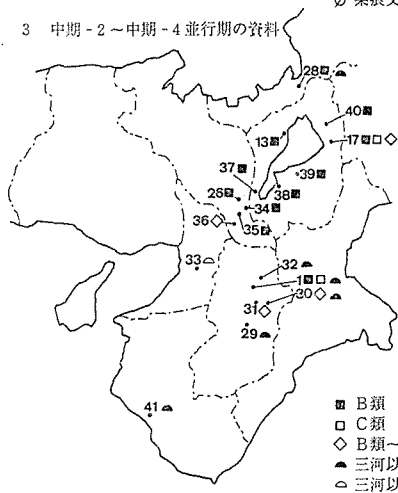
1 晩期末～前期並行期の資料



2 中期 - 1 並行期の資料



3 中期 - 2 ～中期 - 4 並行期の資料



4 円窓付土器

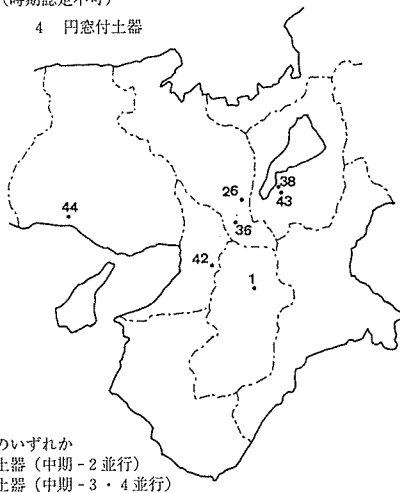


図6 近畿地方における搬入土器の出土状況 (円窓付土器を含む)

- | | | | |
|----------------|-------------|-------------------|-------------|
| 1 田原本町唐古・鍵 | 12 新旭町針江中 | 24 南部町大目津泊り | 35 京都市深草 |
| 2 天理市布留 | 13 新旭町針江南 | 25 田原本町多 | 36 長岡京市雲宮 |
| 3 平城左京八条二坊一坪下層 | 14 守山市山賀 | 26 京都市長刀鉾町(烏丸綾小路) | 37 大津市南滋賀 |
| 4 堺市四ツ池 | 15 能登川町今安楽寺 | 27 米原町大乾 | 38 守山市服部 |
| 5 八尾市美園 | 16 彦根市福満 | 28 敦賀市吉河 | 39 近江八幡市浅小井 |
| 6 大阪市長原 | 17 米原町立花 | 29 吉野町宮滝 | 40 長浜市鴨田 |
| 7 茨木市東奈良 | 18 米原町筑摩畑 | 30 桜井市大福 | 41 南部町高見 |
| 8 向日市鶏冠井 | 19 長浜市川崎 | 31 橿原市四分 | 42 柏原市平野 |
| 9 京都市高倉宮下層 | 20 長浜市塚町 | 32 天理市平等坊・岩室 | 43 守山市下之郷 |
| 10 京都市京大教養部構内 | 21 神戸市本山 | 33 八尾市恩智 | 44 姫路市八代深田 |
| 11 亀岡市太田 | 22 和歌山市鳴神 | 34 京都市中臣 | |
| | 23 海南市亀川 | | |

つづいて存注している。したがって近畿地方で出土する条痕文土器は、内傾口縁土器などのように器形に特徴あるものを除くと、条痕調整をしているという根拠のみでは中期に下る時期のものであるのかどうかは判断しがたい。こうした条件を考慮して（図6-1-2）では、明確に中期Ⅰの時期であると認定できる厚口鉢A（△）・同B（▽）、前期に属する内傾口縁土器（▲）、それ以外の条痕文土器のうち、特徴から前期段階と認定可能なもの（○）、中期と認定可能なもの（◎）、条痕文土器であることは明らかだが時期を決め難いもの（◇）というように区別して表示した。また、東日本系の土器（★）は、浮線文土器と呼ばれるものを中心としており、おおむね近畿地方での縄文晩期末～弥生前期並行期の所産と予想されるものの、時期・搬出元ともに位置づけの未確定な部分も多いため、一括して表示してある。なお、中期Ⅰの基準としたA類文様の壺形土器については、唐古・鍵遺跡で貝殻描の文様を施す壺形土器片が報告されているものが唯一可能性をもつが、搬入品と明言できるまでは至らない^⑤。この種の壺形土器は近畿地方のⅡ期の壺形土器と器形・文様とも類似しているため、報告に際して見落とされている可能性も高いと思われる。

以上の土器のうち、遺構出土のものはいずれも近畿地方におけるⅡ期以前の土器と共存関係にある。特に内傾口縁土器や厚口鉢A・Bに関してみると、亀岡市太田遺跡や唐古・鍵遺跡出土例をはじめとしてⅠ期からⅡ期に位置づけられる土器と共存しており、伊勢湾地方においてこの種の土器が前期から中期Ⅰのうちにしか存在しないことから、両地方の土器編年の並行関係が判明する。また、分布についてみると、伊勢湾地方に近い近江地域で多く出土しているのは当然としても、日本海側を除く近畿地方全域において広く出土が確認されている状況であると言ってよい。土器の搬入という現象から見る限りでは、西日本から伊勢湾地方への弥生文化の伝播期と考えられる前期～中期初頭の頃に東から西への流れも存在したことを示している^⑥。

ただし、その分布を時期・種類別により細かくみると、縄文晩期・弥生前期・同中期Ⅰと時期が下るにつれて、搬入土器の出土は近畿地方でも東寄りの山城北部～近江といった地域か、大和地域の拠点的な遺跡にほぼ限られる傾向もまた、

指摘できる。すなわち、縄文晩期～弥生前期の時期のものとみられる東日本系の土器群は近畿地方全域に広範な出土が確認されるのははじめとして、内傾口縁土器も比較的広域にわたる出土をみているのに対して、时期的に後出する厚口鉢A・同Bの出土例は激減している。そして、それ以外で中期段階と認定可能な条痕文土器も、ほぼ近江地域を中心とする地域での出土に限られつつあると言ってよい。こうした状況については、前期までみられた二大地方間の広範な交流が、次第に両地方が互いに接している地域間のみ限定される交流へと、内容を変化させつつあるものと理解することが出来る。

b 中期―2～中期―4の土器の広がり

中期―2～中期―4の土器については、ほとんどが壺形土器の搬入品である。そのうち、明確に伊勢湾地方での時期が確定できるものは胴部文様の破片であり、加えてそれらの大半は中期―2すなわちB類文様をもつ胴部破片である。それ以外は、特徴的な器形である細頸壺の口縁部破片が出土していることにより搬入品として認定されるものであるけれども、前章で述べたように、口縁部から頸部にかけての文様の変化は漸移的であるためB～D類のいずれの口縁部かを限定しがたく、これらの時期比定については推定にとどまらざるを得ない。以上の条件に鑑みて(図6-3)では、胴部文様のモチーフなどが確認可能で明確にB類と認定できるもの(■)、C類と認定できるもの(□)、いずれとも決め難い口縁部破片など(◇)、と区別して表示し、出土例は少ないものの、三河地域以東からの搬入土器も、中期―2並行期に位置づけられるもの(●)、中期―3・4並行期に位置づけられるもの(○)もあわせて表示した。

量的に最も多いのは中期―2に位置づけられるB類の土器であり、それも近畿地方でも東寄りの山城北部・近江といった地域が中心となる。またこれらは、近畿地方のⅢ期(古)の土器と共存関係にあり、時間的並行関係を求める根拠ともなる。そうした共存事例のうち、例えば大津市南滋賀遺跡出土土器が示ように、近江地域では、搬入品以外に明らかに伊勢湾地方の中期―2の細頸壺を模倣したと考えられる壺形土器がみられる。このことは、この時期の西側の近畿地方と、

それとは全く異なる独自の土器様式を成立させていた東側の伊勢湾地方との関係について、それまでの、土器の搬入のみにとどまっていた関係から、東側の伊勢湾地方から西側の地域に土器製作にもかかわる強い影響を及ぼす関係へと性格が大きく変容していると判断できる。

しかしながら、こうした強い影響が及ぶのはほぼ近江地域までにとどまっており、また中期―1までは、条痕文土器や東日本系の土器など尾張地域に限らないより遠方の地域からと推測されるものが多く搬入されていたのに対して、近江地域にみられる搬入土器についてはほぼ尾張地域からのものに限られるようになってしまう。こうした近江での状況とは対照的に大和地域では、唐古・鍵遺跡など拠点的な遺跡に限定されてではあるが、中期―1までと同様に三河地域以東の中部・関東地方からの搬入土器も少なからず認められている。これが、単に伊勢湾地方に接している位置的な条件によるものなのか、それを越えた遺跡の性格によるものなのかについては、いずれとも現状では判断し難い。ただ、近江地域では、遺跡の規模・性格とはとくにかかわりなく搬入土器の出土が認められるのに対して、大和地域では従来より拠点集落と理解されているような遺跡に限られてそれが認められることは、興味深い現象といえよう。いずれにせよ中期―2においては、東から西へ影響を与える関係ではあるものの、前時期にみられた傾向をより強めて、両地方が境を接している空間を中心とする、限定された範囲内での交流になったものとみられる。

ところが、それ以後の時期の搬入土器、すなわち中期―3・4の土器は、明確にそれと認定できるものについては極端に少なくなる。特に中期―4の土器については、その指標となるD類文様が一目して認識可能なほど特異なものであるにもかかわらず、近江地域も含め近畿地方での出土は目下皆無である。よってこの時期に至って、近畿地方と伊勢湾地方との関係は、互いに影響を与え合うことも含めて交流がほとんど行われない状況となっていたと断言することが出来る。なお、C類の土器はわずかながらも共存事例があることから、中期―3と近畿地方Ⅲ期(古)とが時期的にほぼ並行することがわかる。^⑤ 近畿地方で全く出土を見ないD類の土器は、近畿地方に接する伊賀・伊勢といった地域では凹線文をもつ土器と一

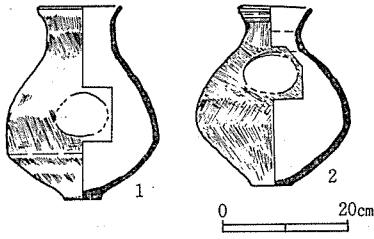


図7 朝日遺跡出土円窓付土器(縮尺1/12)

部で共存関係にある。^⑧ よって、中期—4は近畿地方でのⅢ期(新)からⅣ期にかけてと並行関係にあると位置づけるのが妥当であろう。

c 中期—5の土器及び円窓付土器の広がり

中期—5は、前章で述べたように伊勢湾地方の土器が近畿地方の影響を強く受け大きく変化する時期と評価されてきた。要素からみて、Ⅳ期にほぼ並行するとみて良からう。ただし、伊勢湾地方の土器製作において、凹線文や叩き技法の採用など明らかに西日本からの伝播であると考えられる現象が認められ、同時に、高杯などの器形にみるように近畿地方と全く違わないものが出現しているにもかかわらず、近畿地方の土器が伊勢湾地方に、また逆に伊勢湾地方の土器が近畿地方に搬入されていると明確に指摘できる例は無い。^⑦ そして、壺形土器についてはすでに述べたが、それ以外に、例えばほぼ並行する時期の近畿地方Ⅳ期にみられる器台や水差しは伊勢湾地方ではほとんど見られず、一方で伊勢湾地方では台付の甕が目だつようになるなど、近畿地方との違いを明瞭化させているのをはじめとして、文様構成が類似していても楡描文の原体は両地方で明らかに異なっているなど、^⑨ こうした西側の地方からの影響は全ての面に及んでいるわけではないことがわかる。つまり、西からの流れは選択的に受容され、それまでの伝統を生かしながら改変されている状況が看取れるのである。

さて、そうした状況の中にあつて、この時期の伊勢湾地方に特徴的な土器として、いわゆる円窓付土器の存在が挙げられる。円窓付土器の出現そのものは中期—4に遡り、後期以降の例も若干存在するけれども、それが盛行するのは中期—5である。他の壺形土器とは異なるそれ固有の器形をもち、おおむね無文様で胴部上半を焼成前に大きく円形穿孔するものである(図7)。伊勢湾地方での分布はほぼ尾張地域に限定されている。^⑩

ところが近畿地方各地では、それ以外の搬入品がほとんど認められない中であつて、この

円窓付土器と同様な特徴を持つ土器が出土をみている（図8）。ただしこれらは、いずれも実見する限りにおいて固有の形態と特徴を持つ尾張地域の円窓付土器が搬入されたとは認め難い。すなわち、例えば姫路市八代深田遺跡出土の（図8-2）ついでにみれば、器形や作り方は播磨地方の在地の壺形土器と同じであるといった具合に、近畿地方の出土例は、おおむねそれぞれ出土遺跡の位置する地域の壺形土器に、胴部上半の焼成前穿孔という円窓付土器の最も目だつ特徴のみを模倣して作られているのである。加えてそれらのうち共存遺物から時期比定可能なものは、ほぼすべて近畿地方のⅣ期に位置づけられる。よって、これら近畿地方における円窓付土器は、これまでみてきた搬入土器とは、性質を全く異にしていることが知られ、中期Ⅰ-5（近畿地方のⅣ期）という限られた時期における両地方間の特殊な交流関係の存在を示唆している。円窓付土器が祭祀に用いられたものであると仮定するならば、土器作りという実用的情報よりも、祭祀という非実用的要素のみが

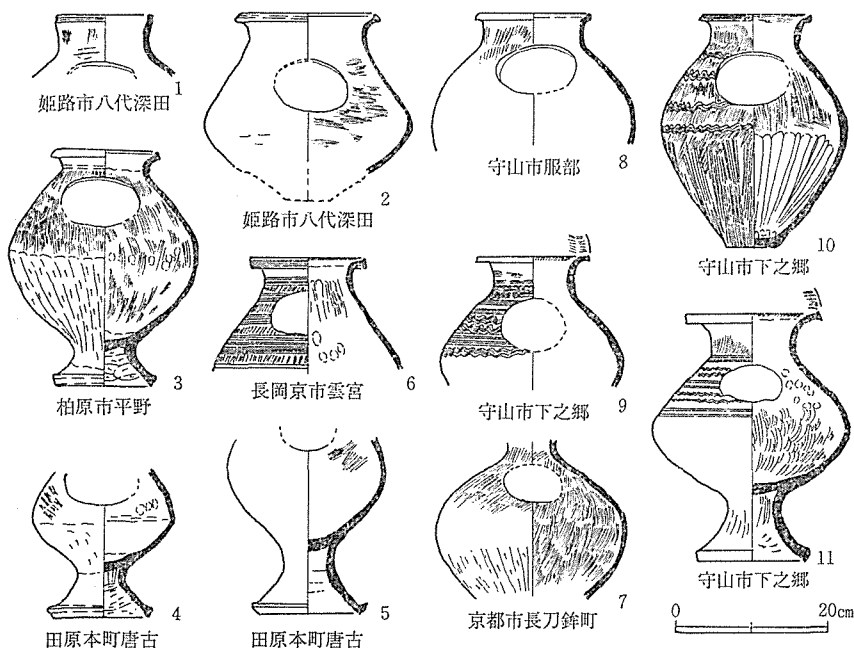


図8 西日本各地出土の円窓付土器（縮尺1/10）

選択的に伝達・受容されたことになり、交流関係の内実を探るうえでの手がかりとなる、興味深い現象といえよう。

- ① 森本六爾・小林行雄編『弥生式土器聚成図録』正編、一九三八年、五〇～六六項。
 - ② 小林行雄「第五章 弥生式土器細論」(宋永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学考古学研究报告第十四六冊、一九四三年)。
 - ③ 佐原眞「畿内地方」(小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編2、一九六八年)。
 - ④ 一九八〇年代までの研究上の問題点は、井藤暎子がまとめている。井藤暎子「入門講座弥生土器、近畿」(1) (5) (『考古学ジャーナル』一九五・二〇二・二〇五・二〇七・二〇九、一九八二～一九八三年)。
 - ⑤ 近年各地域単位での土器編年が発表されたけれども、それら相互の並行関係を把握した上で近畿地方の弥生土器編年を総括する作業は未解決のままとされている。寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編1、一九八九年、同II、一九九〇年。
 - ⑥ 前掲注③文獻。
 - ⑦ こうした呼び換えの便法は佐原眞に従った。小田富士雄・佐原眞「瀬戸内をめぐる九州と近畿の弥生土器編年の検討」(小野忠規編『高天性集落跡の研究』資料編、一九七九年)。
 - ⑧ これらは胎土・器形の点では伊勢湾地方からの搬入品とするのに迷うものである。貝殻を原体として楡描文状の文様をつける風習が、わずかながらも近畿地方に存在していた可能性もあり得るであろう。田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第三・三三三次発掘調査概報』、一九八九年、第三八図一～四。
- このほか唐古・鍵遺跡第二次調査 SK101 からは、頸部に複帯構成の稚拙な楡描直線文を施す壺形土器の上半部が出土しており、朝
- ⑨ 日式土器として報告されている。ただしこの例も、貝殻腹縁による施文でない点や、山城から近江地域にかけても同様に稚拙な複帯構成の楡描文施文が認められる点などから、伊勢湾地方からの確実な搬入品とは断言できないと考える。田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第二・二・二四・二五次発掘調査概報』、一九八六年、第一六四～一五。
 - ⑩ 共存関係の明瞭な事例のおもなものを挙げると、内傾口縁土器と前期の土器が共存した例として、京大教養部構内遺跡 A Q 23 T P 1 黒褐色土IV層、太田遺跡 SK149、SD201・SD207、厚口鉢Aと前期Ⅰ第Ⅱ様式の土器が共存した例として、唐古・鍵遺跡第二次 SK121、厚口鉢Bと第Ⅱ様式の土器が共存した例として、唐古・鍵遺跡第三次 SK123^a がある。
 - ⑪ ここでは取り上げないが、弥生時代前期の伊勢湾地方西部や尾張地域北部を中心として、「亜流遠賀川式」と呼ばれる固有の特徴をもつ土器の一群があり、明確にその特徴を示す壺形土器が、唐古・鍵遺跡第二〇次調査 SK1315 で近畿地方の遠賀川式土器に伴っての出土が報告されている。田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第二〇次発掘調査概報』、一九八六年、第二五図一七三。
 - ⑫ なお本稿校正中に、大阪府堺市小阪遺跡より出土した浮線文土器が報告されていることを知った。遺構よりの出土ではないが、縄文晩期Ⅰ弥生前期の土器と出土している。大阪府教育委員会(財)大阪文化財センター『小阪遺跡』本文編、一九九二年、p. 51-55、56。
 - ⑬ 三河地域の瓜郷式、中部地方の阿島式・嶺田式と呼称されている土器群である。
 - ⑭ 八尾市恩智遺跡 SD10・12 出土品一点のみが該当する。知多半島部で中期後葉に編年されている獅子懸式、ないしはそれに類する三河地

域の土器の特徴をもつ壺形土器のうち、比較的古相のものと思われる。

- ⑬ 瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』I・本文編、一九八〇年、Fig. 55-1。
Ⅱ期でも新しい段階に比定される唐古・鍵遺跡第二三次 SD103 からは(図4-4)のような出現段階の細頸壺が出土しており、尾張地域でのA類からB類への変化すなわち中期-1から中期-2への移行が、近畿地方のⅡ期からⅢ期にかけてと時期的に並行していることがわかる。前掲注⑬文献(田原本町教育委員会 一九八九年)第三七図—一二。

- ⑭ このような例は、近江地方も含めた近畿地方のⅡ期の壺形土器からは全く乖謬を追うことができないことから、伊勢湾地方の細頸壺を模倣して成立したものと判断できる。ただしこれらは、伊勢湾地方のものに較べると頸部径が太い。大津市教育委員会『大津市南滋賀遺跡調査概報』一九五八年、図Ⅷ—一九。

- ⑮ Ⅲ期(全巴)の遺構である唐古・鍵遺跡第十九次 SK105 中層からCⅠ類が、Ⅳ期の遺構である第一五次 SD01 下層からCⅡ類が出土している。田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第一三・一四・一五次発掘調査概報』一九八三年、第二五図。田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第一六・一八・一九次発掘調査概報』一九八四年、第二六図—一。
⑯ 三重県阿山郡大山田村北切遺跡B地区 Sx1、y一志郡一志町鳥居本遺跡方形周溝1などでは、DⅡ類の壺と凹線文をもつ土器とが共存関係にある。ただし、同一個体内で凹線文とD類文様が共存して施される例は無い。三重県教育委員会『昭和五八年度農業基盤整備人業地域埋蔵文化財発掘調査報告』一九八三年、一〇一—一〇四項。三重県教育委員会『近畿自動車道(久居)勢和間埋蔵文化財発掘調査概報』V、一九八九年、五三項。

- ⑰ 朝日遺跡 Sx163 出土の土器群は、中期-5に後続する後期初頭頭の特徴をもつが、この中に含まれる高杯のうち一点は丈高の柱状脚をもつもので、近畿地方でのⅣ期~Ⅴ期にかけての高杯と特徴を同じくしている。また、松阪市浦早崎遺跡 Sx15 出土の土器群は、中期後葉から後期前葉にかけてのものを含むが、その中にはⅤ期初頭頭の河内地域の壺と思われる搬入品がある。これより、伊勢湾地方での中期から後期への移行と近畿地方でのそれとが時期的にほぼ並行していると判断できよう。愛知県教育委員会『朝日遺跡』Ⅳ(土器図版編)、一九八二年、図版二七—四五七。松阪市教育委員会『浦早崎遺跡発掘調査報告書』一九九二年、第三〇図—一一。

- ⑱ この点は、既に述べたE類モチーフの説明を参照されたい。
⑲ ここでは凹窓付土器を、胴部の上半部分に焼成前の円形穿孔を施す点を重視して定義している。これは各地で墳墓の供献土器などに散見することのできる焼成後の穿孔土器と区別するためである。古くは既に戦前からこの種の土器は注目されており、最近では朝日遺跡のみで二五〇点近くものが出土が報告されている。詳細は下記文献に譲るが、弥生時代中期に限ってみれば、目下伊勢湾地方における出土の東限は愛知県西尾市岡島遺跡出土例である。西限は同海部郡甚目寺町森南遺跡である。吉田富夫「所謂凹窓付土器及び其の新例に就いて」『考古学』第九卷第八号、一九三八年。愛知県教育委員会『朝日遺跡』I(本文編二)、一九八二年、一七八—一八二項。(財)愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』一九九〇年、図版二九—三二。愛知県海部郡甚目寺町教育委員会『森南遺跡発掘調査報告書』一九九〇年、第二四図—一二七。伊藤淳史「柏原市平野遺跡出土凹窓付土器」(『泉北考古資料館だより』№四二、一九九〇年)。

第三章 弥生時代の地方間交流

これまでの検討によって、伊勢湾地方における弥生中期の土器変化を5段階に区分し、同時に各段階の土器の近畿地方への搬入状況が明らかとなった。ただ、これまでは移動した土器の器種に関しては触れてこなかったが、それについて若干述べる、前期段階の条痕文土器については深鉢あるいは内傾口縁土器・厚口鉢が多数を占め、中期に関しては壺に限定される状況であると言える。搬入品としての認定の容易さという側面がこの結果には影響を与えていると言えなくもないけれども、おおむね伊勢湾地方から近畿地方への土器移動の傾向を示しているものとみなしておきたい。近畿地方内での土器移動のパターンの類型とその背景については都出比呂志の業績^①に詳しいが、本稿での検討例はそのいずれにも該当しない。一地方の範囲を越えた土器の移動については、縄文時代あるいは弥生時代後期以降には報告例やそれに関する論考も認められるが、弥生時代中期の事例に関しては、在地の土器に影響を与えることの無い非恒常的なものとみなされる場合が多く、考察の対象となっていない。本稿で判明した土器の移動例は伊勢湾地方から近畿地方への一方通行的なものであり、その現象そのものは別途検討に値する興味深いものであるけれども、伊勢湾地方内部での地域間関係の検討とあわせて考察する必要がある、他日を期すことにしたい。移動の事例のみをとりあげて両地方間の交流の様相を論じるならば、やはりこれまでの非恒常的・偶発的な移動の結果とする解釈を越え得ないと思われ、よってここでは、これまで判明した結果に両地方の変化の共時的な比較とをかみあわせて総合的な考察を行い、結論としたい。

弥生時代前期から中期初頭の時期については、近畿地方では前期の遠賀川式土器から中期の櫛描文土器への変化と各小地域毎の地域色の発生という展開がみられ、伊勢湾地方においても、条痕文土器との共存・接触・変容を示しながらではあるけれども、近畿地方に若干遅れて前期の遠賀川式土器と中期の櫛(貝殼)描文土器の出現をみる。伊勢湾地方のこうした変化が西側の地方の強い影響のもとに起こったという評価は動かしがたいけれども、すでにみたように、前期に至るま

では伊勢湾地方に限らないより広範な東側の地方から近畿地方全域へと土器の搬入が認められることから、弥生文化の伝播に相前後する時期には広域にわたる双方向的な人の動きが想定でき、そしてそれが、中期になるにつれて変容し、近江・大和など伊勢湾地方との隣接地域に限られていくものといえる。こうした状況は、縄文時代に顕著にみられる広域にわたる土器の分布・移動とそれを支える紐帯が存在していた社会が、いわば弥生時代的な、隣接地域間のつながりの連鎖によって維持される社会へと構造が変容していく様子を示しているとも、理解できるだろう。

こうした中で、中期―2（Ⅲ期古）以降の両地方は、それぞれ独自の土器製作を展開させていくことになり、地方間の土器の動きや影響関係もそれにつれて変容する。

伊勢湾地方は明らかに近畿地方の影響から脱し、独得の形態と文様帯を有する細頸壺（B類）が出現する。その文様帯の中心となるのは胴部文様帯であり、文様モチーフは施文部分以外の研磨を重視した特徴的なものである。本稿で既に述べてきたように、それ以後の変化には器表面研磨の省略・施文手順の省略という方向性を有する型式変化を明瞭に追跡でき、ついには櫛描文様をも省略し研磨線のみを文様の主体とする独得のモチーフ（D類）へと到達している。これに対応する土器の動きをみるならば、中期―2のB類は西側隣接地域のみにはほぼ限られて搬出され、それ以前から萌芽しつつあった移動の傾向をよりいっそう強めており、近江地域では在地の土器製作にも影響を与えている。しかし、以後C類では移動は激減し、D類に至っては全く搬出例をみなくなってしまう。

これに対して近畿地方では、櫛描文土器の成立以降、回転台の使用が推定される文様施文技術によって、流麗な直線文・波状文・簾状文を組み合わせた文様を発達させており、さらには伊勢湾地方が独得の研磨線モチーフを誇っていたまぎにその頃（中期―4・Ⅲ期新々Ⅳ）、回転運動を利した凹線文を出現させていたのである。ここにかがわれる変化の方向性は、研究史上かねてより理解されているように、回転台の特性を活用する施文技法の発達ということになる。そして、こ

れら近畿地方の土器が伊勢湾地方に搬出されている例は、明確には確認されていない。

以上のような両地方での変化の道のりの比較から明らかとなるのは、伊勢湾地方での変化の方向性が、近畿地方でのそれとは対照的に回転台の特性とは全く無縁のものであって、むしろそれを利用することのない範囲で可能な限り有効な施文を試みたものであるということである。つまり、「非回転台利用の施文」という技術的伝統の存在が知られるのであり、その極限がD類文様の出現に象徴的に示されていると言えよう。そしてそれゆえに、中期に至るまでは土器でみる限り盛んな交流や影響関係をうかがわれる両地方は、その後の土器製作における技術的伝統の相違から、かたや近畿地方では柳描文様を発達させ、かたや伊勢湾地方では施文部分以外の研磨や縦位方向の分割線という、およそ回転台の特性に反する要素が残存し発達していったのである。また、こうした伊勢湾地方における技術的伝統は、研磨以外の篋描文様・刺突文様などの施文を多様に取捨選択する余地を十分に許容するものであり、近畿地方にみられるような斉一的な文様要素の広がりとは異なって、例えば条痕文土器に示されるように、規範の全く異なる土器群が伊勢湾地方に並存していくことも納得できる。第一次的な弥生文化の広がりすなわち遠賀川式文化圏の西端に位置する伊勢湾地方は、結果として近畿地方の回転台を利用する土器製作までは定着することがなかったのである。

そして、それが大きく変化するのは中期Ⅰ5であり、伊勢湾地方にも明らかに回転台を用いた土器製作技術が導入され、斉一的な近畿地方に類似する器群が広がりを見ることがになる。しかしここで注意せねばならないのは、研究史上評価されてきたような全面的な西日本化とは言えない点であり、型式学的には連続してとらえられる要素も多くみられることも、記憶にとどめておく必要がある。

ところで、およそ型式変化には主として「内的要因」と「外的要因」の二つの動機が考えられるが、おそらくは複雑に絡み合っていたであろう双方の要因のどちらが主でありまた従であるかを把握することが、変化に対する正当な評価の為

には必要である。^③この観点から、これまで検討してきた各要素における型式変化の連続や断絶とその背景を整理してみよう。

伊勢湾地方における研磨の退化・意匠化や施文手順の省略という壺にみられる変化の方向性は、「手抜き方向性」とも呼ぶべき内的要因に基づいたものと言える。そしてそれらは、顕著な断絶が見られることなく中期を通じて連続的变化が追跡可能な要素を中心とするとみてよい。一方、中期―1から中期―2にかけての壺の器形の急激な細頸化や受け口状口縁の出現そして施文手順の増加、あるいは中期―4から中期―5にかけての凹線文や近畿地方的な文様モチーフ（E類）の出現などは、全く突然で型式学的にも断絶しており、そこに内的要因を見いだすことはできない。そしてこれらを外的要因にもとづいていけるとらえるならば、前者については、伊勢湾以東の各地で細頸壺を顕著な特徴とする土器群が出現する現象と時期を同じくしており、汎東日本の変動の一環ととらえることができる。かつまた後者については、凹線文を特徴とする土器群の成立として、近畿地方以西の山陽地方をも含めて要素の共通性がみられる汎西日本の変化の一環と理解できるだろう。

以上の理解をふまえて、土器の移動状況からみた両地方間の交流の実態と型式変化の相関とをみるならば、中期以降に、それまで近畿地方で確認されてきた伊勢湾地方からの搬入土器の広域にわたる出土が、量的にも空間的にも限定されていく傾向を強めていくことは、伊勢湾地方の弥生土器の変化の方向性と近畿地方におけるそれとの対照が明瞭化していく状況に、時期的にみても対応している。はじめのうちは近畿地方の東端である近江地域に一時的に影響を与えているもの、やがて中期―4（Ⅲ期新）に至ると、伊勢湾地方と近畿地方との間での土器の移動や影響関係がまったく認められなくなる。これは、その時期の指標となるD類文様がきわめて伊勢湾地方内的な変化の所産であることを考えると、両地方における土器の変化の方向性が互いに対照の極に達する事情と対応していよう。

一方中期―5（Ⅳ期）には、非常に特異な円窓付土器の模倣品が近畿地方一円に分布することが判明したが、これは伊勢

灣地方の土器が再び近畿地方の強い影響をうける時期と対応しており、単なる土器の移動のみが生じる交流関係とは異なる、思考・風習のレベルにかかわる特殊な結びつきの発生をうかがうことができる。そしてこの時伊勢湾地方では、前段階までからの連続的に変化してきた要素を一部継続して残存させながらも、かなりの断絶が認められたのである。

以上より、弥生時代中期の伊勢湾地方の土器の変化は、近畿地方との交流の強弱を如実に反映したものであるということが出来る。それは、これまでみてきたように、土器の搬出・搬入関係の実態と型式変化の事情とが時期的に対応関係にあるという事実にも、明確に表されている。すなわち、主として内的要因のみの作用する変化が想定される時期には、土器の移動に示される地方間の交流が途絶していく傾向にあり、外的要因の作用した変化が想定される時期には、再び交流が活発化している兆候が認められるのである。両地方間の土器の移動が途絶し没交渉化していくことと、双方の地方での土器変化の方向性が対極を向いていくこととの因果関係は決め難いけれども、中期に至って確認されるそうした現象からは、弥生文化の伝播・定着後に安定した地域圏が形成されていく状況をうかがうことができよう。

また、その両地方間の交流が、周辺の東西日本の広域にわたる動向とも明らかに軌を一にして変動していることも明らかなのであって、これらの相関を追究することから、東西両日本における広域にわたる変動の実態を垣間みることができたと考えよう。具体的に言えば、弥生時代前期から中期にかけては弥生文化の伝播以来の汎西日本の変動の範囲内にあった伊勢湾地方が、その後の汎東日本の変動に関係することを契機として近畿地方との交流を途絶させていった状況と、その結果として独自の変化を遂げていた伊勢湾地方が、中期後半において凹線文の採用に象徴される汎西日本の変化に再びとりこまれて交流を復活させる状況を、本稿では知ることができた。もっとも、伊勢湾地方が完全に汎西日本の変化にとりこまれてしまったわけではないことは、その時期に内的要因の作用する変化も継続していたことより明らかなのであって、このことが、単純な土器移動の再活発化とは異なる特殊な地方間交流を創出する原因となったであろうことは、十分に想定できる。

いずれにせよ、弥生時代の伊勢湾地方は、地方間の交流関係の性格を容容させながらも、西日本の東端から東日本の西端へ、そして再び西日本の東端へと、めまぐるしくその位置を変動させていたのである。

① 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』、一九八九年、二九八～三二〇項。

② 縄文時代に関しては、東北地方晩期の亀ヶ岡式土器の遠隔地での出土事例から、胎土分析の結果をもふまえたうえで、文化圏の広がりや交易ルートの問題に言及している林謙作の業績を一例として挙げる事ができる。また、弥生時代後期以降に関しては多くの事例があるが、東海地方の特徴をもつ土器群の遠隔地での出土事例に焦点を当てた検討事例を、最近の傾向として挙げる事ができる。林謙作「亀ヶ岡文化論」(『東北考古学の諸問題』、一九七六年)。東海埋蔵文化財研究会編『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(第8回東海埋蔵文化財研究会要旨)資料、一九九一年)。

③ 「内的要因」「外的要因」の用語と概念については小林達雄に依る。小林達雄「タイポロジー」(麻生優・加藤晋平・藤本強編『日本の旧石器文化』第一巻・総論稿、一九八三年)。

④ その同時性を示す出土例としては、例えば阿弥陀寺遺跡においてB類文様の壺と阿島式或は嶺田式等と呼ばれている中部地方東半に特徴的な細頸壺との共存関係がある。(財)愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』、一九九〇年、第六七図。

⑤ 伊勢湾地方における細頸壺と他の東日本諸地域にみられる細頸壺とのいずれが時間的に早く成立したのかについては、土器編年の並行関係の現状からは明確には決定できない。現段階で筆者は、ある地域のものが一元的に広域に波及したというよりも、東日本全域でほぼ時を同じくして生じた状況を推定している。その原因と背景の追究は他日

を期したい。なお、B類の細頸壺は、東は千葉県まで報告例があり、伊勢湾地方より東側へはかなり広範に搬出されているとみられる。

【謝辞】 本稿の作成にあたって、小野山節、山中一郎両先生にご指導頂いた。ほか、高橋克壽、森下章司、藤沢彰子各氏をはじめ、京都大学文学部考古学研究室、京都大学埋蔵文化財研究センター、京都弥生文化談話会の諸兄からも、日頃より多くの御教示をいただいている。また、資料調査にあたっては非常に多くの方々にお世話になり全てを挙げ得ないため、左記にとりわけ関係の深い一部の諸氏・諸機関を記しておくことで御容赦いただきたい。末筆ながら、心より御礼申し上げます。なお本稿は、平成五年度文部省科学研究費補助金(奨励A・課題番号〇五七二〇三三五)の成果の一部を含んでいる。

石黒立人・犬塚康博・岡村秀典・加藤安信・桑原久男・小林義孝・斉藤孝正・鈴木克彦・高橋信明・竹内英昭・中井貞夫・野口哲也・菱田哲郎・深沢芳樹・藤田三郎・浜崎悟司・豆谷和之・宮腰健二・山田邦和・山本輝夫・山本博利・吉水眞彦・渡辺 誠・愛知県清洲貝殻山貝塚資料館・(財)愛知県埋蔵文化財センター・大阪府立泉北考古資料館・(財)古代学協会・(財)滋賀県文化財保護協会・田原本町教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・名古屋市博物館・名古屋大学考古学研究室・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・姫路市教育委員会・守山市埋蔵文化財センター

〔挿出典〕

愛知県教育委員会『朝日遺跡』Ⅳ・土器図版編、一九八二年(図4-1-3・6・7・12・14・16、図7-1-2)

愛知県教育委員会『環状二号線関係朝日遺跡群 第一次調査報告』、一九七五年(図4-4・5)

〔財〕愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』、一九九〇年(図4-10・13)

小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編2、一九六八年(図4-8・9・11・15)

名古屋市教育委員会『高蔵遺跡発掘調査報告書』、一九八七年(図5-1・3・5・6)

愛知考古学談話会『糸痕紋不土器文化をめぐる諸問題——縄文から弥生——』資料編1、一九八五年(図5-2・4)

美浜町教育委員会『下高田遺跡』、一九七七年(図5-7・9)

『半田市誌』資料編一、一九六八年(図5-10・11・16・17)

愛知県教育委員会『貝殻山貝塚調査報告』、一九七二年(図5-12・14・15)

〔財〕愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』、一九九〇年(図5-13・18)

姫路市文化財保護協会『八代深田遺跡』、一九七七年(図8-1-2)

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝國大学文学部考古学研究報告第一六冊、一九四三年(図8-4・5)

〔財〕長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市文化財報告書』第一四冊、一九八五年(図8-6)

〔財〕古代学協会『平安京左京四条十三町一長刀鉾町遺跡』、一九八四年(図8-7)

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・〔財〕滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、一九八六年(図8-8・10)

守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』第二〇冊、一九八六年(図8-9)

伊藤淳史『柏原市平野遺跡出土円窓付土器』大阪府立泉北考古資料館『泉北考古資料館だより』№四二、一九九〇年(図8-3)

なお、図8-11は守山市教育委員会山崎秀二・伴野幸一氏の御厚意により図化させて頂いた。また、図3のうち1・5・9・15は愛知県清洲貝殻山貝塚資料館蔵の朝日遺跡出土土器を、6は名古屋大学考古学研究室蔵、7は名古屋博物館蔵、8は京都大学文学部博物館蔵のそれぞれ西志賀貝塚出土土器を、各機関の御厚意により撮影させて頂いた。

〈遺跡別参考文献〉 * 遺跡名の前の番号は、図6と対応する

府県名	遺跡・遺構	文	献
奈良	1 唐古	『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊），1943，第35図—443・444，図版43—4，53—1	
	1 唐古・鍵15次 S D 01 下層	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』，1983，第25図	
	19次 S K 105 中層	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』，1984，第26図	
	S D 203 中層	同上，第38図—1	
	S D 203 上層	同上，第38図—3	
	S D 204	同上，第38図—2，4	
	20次 S K 215	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報』，1986，第24図—67ほか	
	22次 S K 51 ほか	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』，1986，第32図，図版18	
	23次 S K 123	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報』，1986，第33図	
	S D 103	同上，第37図—12	
	S D 106 ほか	同上，第46図	
	26次 S K 2202 ほか	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』，1987，第18図	
	33次 S D 204 ほか	田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡第33次発掘調査概報』，1989，第38図，図版35	
	2 布留	埋蔵文化財天理教調査団『奈良県天理市布留遺跡・三島（木寺）地区・豊田（三反田）地区発掘調査報告』（中間報告16），図34—6	
	3 平城京左京八条二坊一坪下層	奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度，1988，pp. 13~17	
25 多	関川尚功「田原本町多遺跡発掘調査報告」		
29 宮滝 8 次	奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』（1983年度・第二分冊），1984，図11—152，13—170		
30 大福土坑12	奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報』（1982年度・第一分冊），1983，p. 222		
土坑16	奈良県立橿原考古学研究所『大和考古資料目録』（第10集 大福遺跡），1982，写真896		
31 四分 S D 630	奈良県立橿原考古学研究所『大福遺跡』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第36冊），1978，第34図—19		
S K 690	奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ，1980，Fig. 40—10		
32 平等坊・岩室 4 次 S D 02 上層	天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『岩室池古墳・平等坊岩室遺跡』，1985，図58—22		
8 次大溝	岩崎しのぶ「天理市平等坊・岩室遺跡出土の東海系土器」『みずほ』（大和弥生文化の会会報）第6号，第6図		
大阪	4 四ツ池	向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集，1983，p. 222（注22）	

- 5 美園
6 長原
7 東奈良Ⅱ—A区溝28
33 恩智 S D 10・12
42 平野
8 鶏冠井
9 高倉宮下層
10 京大構内 A P 23区 T P 1 第10層
11 太田 S K 149・S D 201・S D 207
26 長刀鉾町溝 3 ほか
26 烏丸綾小路 S D 1
34 中臣
35 深草溝状遺構
36 雲宮 (長岡京左京第35次)
(長岡京左京第216次)
滋賀 12 針江中
13 針江南 B 区 S X 1 ほか
14 山賀
15 今安楽寺 S K 06 ほか
16 福満
17 立花 S D 01
S K 04
S K 09
S K 16

- (財)大阪文化財センター『河内平野遺跡群の動態』Ⅱ, 1991, 図版172—1427
(財)大阪市文化財協会『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ, 1983, 図版90—88
茨城市教育委員会『東奈良——発掘調査概要』Ⅱ
瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ・本文編, 1980, Fig. 55—1
伊藤淳史「柏原市平野遺跡出土円窓付土器」大阪府立泉北考古資料館『泉北考古資料館だより』No. 42, 1990
向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集, 1983, pp. 127—240, 第90図—42
(財)京都文化財団『平安京左京三条四坊四町』, 1988, 第97図
宇野隆夫・岡田保良「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』(昭和53年度), 1979, 第43図—V 4・V 5
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第6冊・太田遺跡, 1986, 第36図—68・40
図—4・48図—99
(財)古代学協会『平安京左京四条十三町——長刀鉾町遺跡——』, 1984, 第55図—125, 61図—201, 69図—30
(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査要』, 1987, pp. 14—19, 図4—16
(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』(二), 1986, 参考図版2—3
林和広「深草遺跡出土の弥生式土器」京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概報』, 1974, 第61図—41
(財)長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市文化財報告書』第14冊, 1985, 第99図—15
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概要』第40冊, 第63図—7
同上, 第10図—52
滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『一般国道161号(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘
調査報告書Ⅲ——針江中遺跡針江南遺跡——』1991, 第19図—201, 22図—243, 27図—328図—331, 30図—
382, 32図—555・556, 39図—496
滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要——新守山橋梁工事
に伴う山賀遺跡の調査——』, 1986, 第16図
能登川町教育委員会『今安楽寺遺跡』(能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集), 1991, 1244・1299
彦根市教育委員会『福満遺跡——発掘調査概要報告書——』, 1982, 第5図—21
米原町教育委員会『立花遺跡発掘調査報告書——県営ほ場整備かんがい排水路に伴う発掘調査——』, 1988,
第6図—14
同上, 第7図—28
同上, 第8図—41
同上, 第8図—48・49・53

P—11ほか

18筑摩畑

27大乾

19川崎

20塚町 S X02

S R01

37南滋賀溝状遺構

38服部

39浅小井

40鴨田 4 次 1 号方形周溝墓

43下之郷環濠下層

兵 庫

21本山

44八代深田

和歌山

22鳴神貝塚

23亀川

24大目津泊り

41高見

福 井

28吉河

同上, 第 8 図—54, 第 9 図—101, 第14図—129・135・139・142・143, 第17図—179, 第22図—278~286

米原町教育委員会『一般国道 8 号 (米原バイパス) 関連遺跡試掘調査報告書』, 1989, 第11図—70・71

同上, 第 7 図—23

滋賀県教育委員会『国道 8 号線長浜バイパス関連遺跡報告書』 I, 1971, 挿図13

古川登「近江における弥生中期前半の土器について——長浜市塚町遺跡 S X02出土の一括遺物について——」
『滋賀考古』第 4 号, 1990, 第12図30~35

同上, 第13図 9・10

大津市教育委員会『大津市南滋賀遺跡調査概報』, 1958, Ⅷ—16

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅱ, 1985, 図
版235—E162・図版240—E213

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ, 1986, 図
版191—D148

滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅲ——浅小井
(高木) 遺跡——』, 1986, 第11図—14

長浜市教育委員会『十里町遺跡・鴨田遺跡調査』, 1988, 第60図—129

守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』第20冊, 1986, pp. 32~45, 第25図—15

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ, 1986, 第
52図

(財)古代学協会『本山遺跡発掘調査報告書』, 1984, 第11図—14

姫路市教育委員会『八代深田遺跡』, 1977, 第17図—98, 第26図—249

和歌山県教育委員会『和歌山県文化学術調査報告書』第三冊, 1968, pp. 17~68, 第17図

海南市文化財調査会・海南市教育委員会『亀川遺跡』 V, 1985, 第22図—110

愛知考古学談話会『<桑痕文系土器>文化をめぐる諸問題——縄文から弥生——』資料編 I, 1985, p. 405, 第 7 図
『和歌山県史』考古編, 1983, 図473

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『吉河遺跡発掘調査概報』, 1986, 第24図—2・5・11, 図版17—22

(無線長針刺器は弥生時代から) 一宮

affiliation with 'Chu-long' and might have evolved out of the latter in the current of cultural unification of China throughout the Spring-Autumn period and the Warring-States period. 'Chu-rong' plays almost the same role as 'Chu-long' does and is closely linked with Sun-belief although his appearance has changed to become more human and less beastly. Because 'Chu-long and Sun-belief were indivisible in origin, it is natural to see that 'Chu-rong' appears with the 'Sprite tree (扶桑)' on the T-shaped painting Silks of the Mawangtui Tombs of the Han dynasty in Changsha, Hunan Province. This unification incontrovertibly illustrates how this essential element of the Sanxingdui belief was inherited in China several centuries later.

To conclude, the Sanxingdui discovery will not only be verified as an independent civilization, but will also most likely lead us to the conclusion that the basic part of the myth recorded in "Shanhaiqing" was originally the belief of the ancient Shu and was gradually absorbed into the belief-system of the Yangtze valley after the fall of that civilization. Eventually this belief was accepted by the rest of China.

Rigional interaction during the Yayoi Period

—Typological changes in, and movement of,
Yayoi Pottery in the Isewan Region—

by

ITO Atsushi

This paper, based on an investigation of pottery during the Early and Middle Yayoi Periods for the purposes of understanding social trends in East and West Japan following the spread of Yayoi culture, contributes to the clarification of the nature of the interaction between the Isewan and Kinki regions during that period.

From a typological investigation of the design techniques apparent in pot-shaped pottery found in the Owari Plain, it is seen that with the passage of time the process of during designs tended to be omitted and burnishing techniques gradually degenerated. Having established the chronological sequence of these changes, together with their particular

characteristics the Middle Yayoi Period in the Isewan region is divided into five stages.

From a collection and examination of pottery from throughout the Kinki and Isewan regions and from east of the Isewan region, it is seen that whilst in the Early Yayoi Period imported pottery is found throughout the whole region, in later periods its distribution is restricted to areas closest to Isewan, no imported pottery being found outside of Isewan by the Middle Period-4.

Changes in Yayoi pottery in the Kinki region are conventionally understood to be linked to developments in design technique made possible by effective use of the potter's wheel. From this investigation it can be seen that in the Isewan region such changes were not related to the use of the potter's wheel but were the result of attempts to achieve the most efficient design techniques possible without use of the wheel. The Middle Period-4 in Isewan, which corresponds to the Later Period 3-4 in Kinki, can be seen as a period when the directions of change in pottery design in the two regions were opposed and movement of pottery between the regions was coming to an end. In other words, changes in pottery in the Isewan region are clearly reflected in its interaction with the Kinki region, and furthermore, from a comparison with the surrounding areas, are seen to correspond closely with changing social trends throughout East and West Japan at that time.

The Folklore Studies of Yanagita Kunio and
Todai Shinjinkai: With special reference to Omachi Tokuzo

by

TSURUMI Taro

In the 1930's Yanagita Kunio 柳田國男 developed his own style of folk research and in 1935 established the Folk Society 民間伝承の会, which many leftists joined as a result of the thought control activities of the government. Some of these, who had been members of Todai Shinjinkai 東京帝大新人会, and who had been leaders in the students' social movement of the 1920's devoted themselves to Yanagita's folklore studies. It